

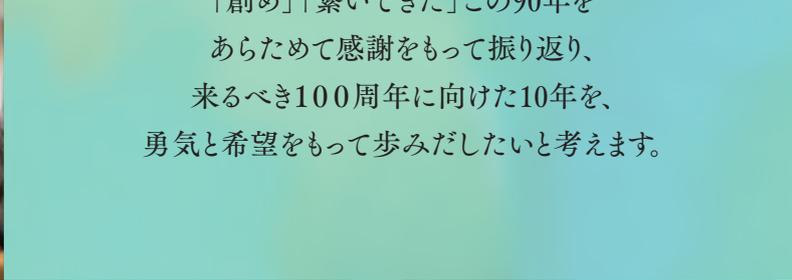
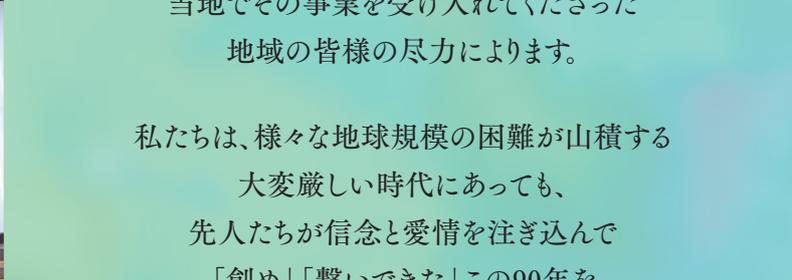
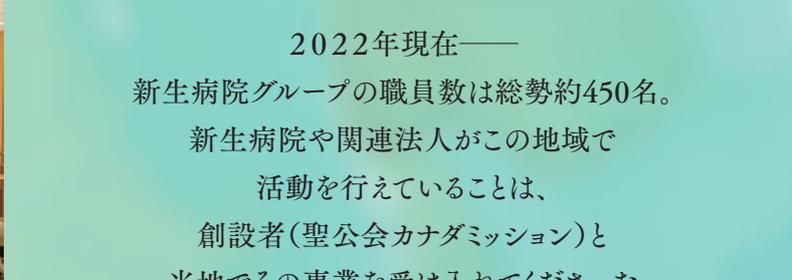


90年の歩みへの感謝 100年に向けた新たな歩みだし

2022年現在——

新生病院グループの職員数は総勢約450名。
新生病院や関連法人がこの地域で
活動を行えていることは、
創設者(聖公会カナダミッション)と
当地でその事業を受け入れてくださった
地域の皆様の尽力によります。

私たちは、様々な地球規模の困難が山積する
大変厳しい時代にあっても、
先人たちが信念と愛情を注ぎ込んで
「創め」「繋いできた」この90年を
あらためて感謝をもって振り返り、
来るべき100周年に向けた10年を、
勇気と希望をもって歩みだしたいと考えます。



新生病院グループ概要

生きていくこと、老いていくこと、病気になること、人生を閉じていくこと
人生の様々なステージで、その時々に向かい合う課題に
「医療」「福祉」「介護」「生活支援」等、
多角的観点から、今の私たちにできることを――



- 入院(地域包括ケア・療養・緩和ケア・回復期リハビリテーション)
- 訪問診療
- 外来診療
- 健康管理センター
- リハビリテーション



- 居宅介護支援
- 通所サービス
- 訪問サービス(看護・介護)
- 入所サービス(サービス付き高齢者向け住宅・グループホーム)
- お看取り支援



- 海外医療協力・被災地支援
- 環境・交流
- ボランティア
- 歴史伝承



- レストラン・売店営業
- 移動販売
- 配食サービス



i n d e x

新生病院グループ概要
3

施設紹介・全景
4

ごあいさつ
6

新生病院グループ
90年の歩み

10

未来に受け継ぐ先人たちの歩みの物語
～100年に向けたプロローグ～

24

新生病院歴代院長

30

年譜
語り継ぐ90年

35

100年に向けて

51



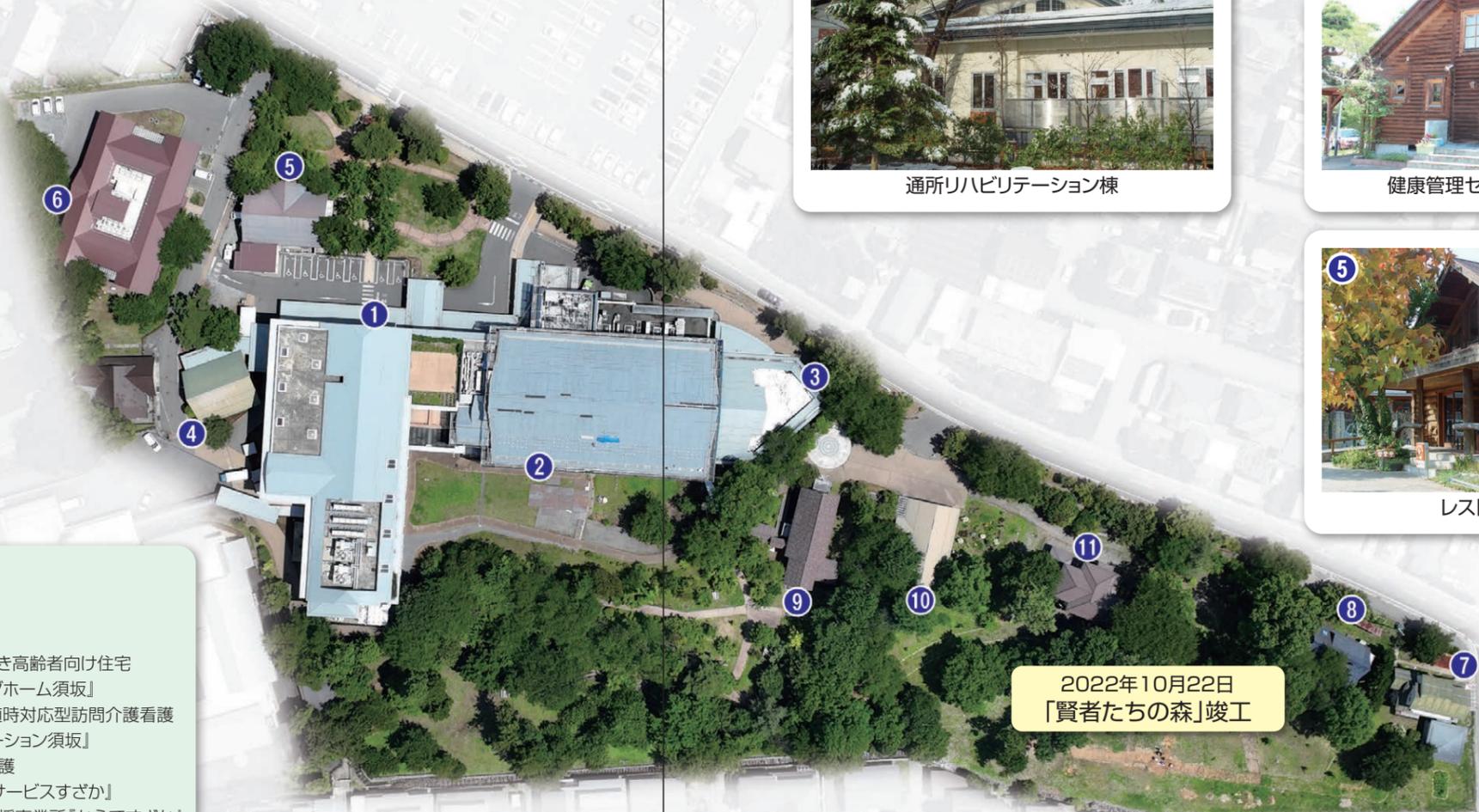
6 パウル会小布施ケアセンター
 ●訪問看護ステーション『希望(のぞみ)』
 ●居宅介護支援事業所『かえで』
 ●看護小規模多機能型居宅介護『さくらの園』
 ●認知症対応型共同生活介護事業所『やまびこの家』



7 パウル会本部棟



8 パウル会技能実習生寄宿舎



1 新生病院西棟 (外来・病棟)



2 新生病院東棟 (病棟・リハビリ)



3 通所リハビリテーション棟



4 健康管理センター ヘルシーベル



5 レストラン メイプル

各地域での展開



須坂市

- サービス付き高齢者向け住宅
『ナースィングホーム須坂』
- 定期巡回・随時対応型訪問介護看護
『ケアステーション須坂』
- 療養通所介護
『療養デイサービスすざか』
- 居宅介護支援事業所『かえですざか』
- 訪問看護ステーション
『希望(のぞみ)すざかサテライト』



中野市

- 訪問看護ステーション
『希望(のぞみ)ほくしんサテライト』

2022年10月22日
「賢者たちの森」竣工



9 新生礼拝堂



10 スタートハウス



11 ミスパウル記念館

90年への感謝と100年に向かって



渋澤 一郎

特定医療法人新生病院 理事長
特定非営利活動法人ワンダ임 理事長

新生病院はその前身である新生療養所開所から数えて本年創立90周年を迎えることができました。創立以来幾多の変遷を経て来ましたが、ここ小布施の地を基盤としてこの地域の医療を長きにわたり担って来ることができましたのも、ひとえに今まで新生病院に関わってくださった多くの皆様方のご支援の賜物であると心より感謝申し上げます。

新生療養所は1932(昭和7)年、9月に開所しました。当時、中部地方で伝道していたキリスト教会であるカナダ聖公会が日本の結核蔓延を憂慮し、結核療養所の設立を本国に要請し実現したのでした。小布施村(当時)の全面的な協力も忘れることはできません。

カナダ聖公会の療養所設立の趣旨はたとえ小さな事しかできなくてもそれに挑戦することが自分たちの使命(ミッション)であるところにあります。戦時中の困難な時代やその後の危機もその精神で乗り越えて来ることができました。これからも現状に満足することなく、より質の高い医療・看護・介護・福祉を目指してまいります。

小さな団体の働きが90年にわたって継続され、現在ではNPO法人パウル会、「NPO法人ワンダ임」(以下「ワンダ임」)、「株式会社メイプル」を抱えるグループにまで成長しています。

「ワンダ임」は海外医療協力(新生病院では数十年前から行っています)、「環境の保全・整備及び人々との交流を目的とした病院庭の公園化(賢者たちの森)」、歴史資料の収集等を通して創立の歴史と精神を継承し、地域の人々や世界の必要に応じてまいります。

90年の歴史を刻んで来たとはいえ新生病院グループは未だ発展途上にあります。創立100年に向かって常に挑戦する精神を忘れず、真の自立(自律)を目指して前進してまいります。これからも皆様のご支援・ご協力・お祈りを心よりお願い申し上げます。

「戻る場所(原点)の確認と進む道(未来)への歩み出し」



宮島 義人

特定非営利活動法人パウル会
理事長

神と自らの関係性の中で、結核に苦しむ日本人の状況に向き合ってその働きを創めてくださったカナダ聖公会の創設者たち(宣教師や医療技術者、母国でその歩みを支えた教会の数多くの信徒)、創設から現在に至るまでその成長を見守り、様々な支援をもってお支え下さった小布施町(当時小布施村)をはじめとした地域住民の皆様、90年にわたる事業の担い手となりそれぞれの場所で働いてくださった職員の方々……、数えきれない尊いお支えにより当法人グループは、90年の歴史を重ねてくることが出来ました。

人類が今まで経験したことが無い少子高齢化社会へと歩みを進めていく私たちの地域社会において私たちが取り組ませていただく仕事は今後ますます増え、広がっていくことでしょう。

結核治療からスタートし、様々な変化を経ながら現在は地域包括ケアへの取り組みにあたる当事業体は今後さらに形を変化させて未来へ向かって進んで参りたいと考えて次第です。しかしながら、「変化や成長を遂げていこうとすればするほど、何よりも必要なことは立ち返る『原点』深く心に刻みつつ進んでいくことであると強く認識をします。この後も様々な試練があり困難も訪れることでしょう。またそれと同じくらい或いはそれ以上に様々な喜びも備えられていることと想われます。

私たちの事業体には、唯一無二の尊い創設の志とそれを命がけて体現し守ってこられた諸先輩方の貴重な足跡があります。

90周年という一里塚で立ち止まり、創立の理念とここまでの歩みをしっかりと心に刻み、未来に向けた歩み出しを創められることを心より感謝申し上げます。

新生病院グループ90周年によせて



石井 栄三郎

特定医療法人新生病院 院長

新生病院グループが1932年にカナダ聖公会によって設立されてから90年の歩みを経て、今日という日を迎えることができたことを心からお喜び申し上げますとともに、多くの方々の支援と先人たちの努力に敬意を表し、感謝いたします。

私が初めて新生病院と関わったのは、長野県立こども病院の勤務時代に小児がんの子どものターミナルケアを依頼した時でした。小児は初めてのことでしたが、受け入れ準備をしっかり整えて下さり、とても温かい病院だと感じました。2回目は私の治療した患者さんが再発し、ホスピスに入院されたと連絡をいただきお見舞いに行った時で、病棟が明るく、辛い気持ちを癒してくれる雰囲気を感じました。

それから10年、2017年に新生病院に就職させていただいた時は、職員たちの笑顔、挨拶、患者中心の対応が素晴らしく、時間がゆつくり流れていて病院らしくなく、患者さんたちが安心して病棟と感じました。病院の歴史を知ること、これらは創立以来脈々と受け継がれてきたキリストの愛と精神に基づくものだとわかりました。患者さんに仕えること、それが自然に行える伝統が新生病院にあります。カナダ聖公会の方々が遠く離れた日本に結核療養所を設立して下さったこと、小布施町の人々が当時敬遠されていた結核療養所を迎え入れてくれたこと、社会情勢の変化でカナダ人が引き上げた後に残された職員が療養所の存続に尽くしてくれたこと、医学の発展で療養所の使命が終わり一般病院となった時や宗教学者から医療法人となった時など幾多の困難に職員が踏みこたえ、地域の人々が支援の手を差し伸べて下さったことなど、全てが隣人愛に基づいていると思えます。昨今は新型コロナウイルス感染症に苦しめられていますが、新生病院に勤めていることを誇りに思い、90年の歩みへの学びと感謝により窮地を乗り越え、100年に向けた新たな歩み出しを誓い、次の世代に繋いでいきたいと思います。

感謝をこめて



桜井 昌季
小布施町 町長

新生病院グループの創立90周年、誠にめでたくお祝い申し上げます。

新生病院は小布施町の命を支えてくれる大事なパートナーであり、またここ3年間は新型コロナウイルス感染症に対して、地域医療のハブとなって小布施町を支えていただいております。深く感謝申し上げます。

診療の基本方針は「初代院長スタート博士が実践し展開した人間味あふれる医療を継承し発展させます」とあり、病態だけでなく年齢・性別・社会的立場役割・家庭環境や状況を考慮して適切な診察をすること。お気持ちやお考えを十分にお聞きし適切な情報提供や説明を行い、ご本人の納得と自己決定を支援すること。安心や信頼を得られるよう細心の注意をすること。これらは患者さん一人ひとりがその人らしく幸せに生きていけるように医療を通して支えていくという新生病院のスタッフの皆さんの想いであり、それは緩和ケアやリハビリ、訪問診療などにもわかりやすく表れていると思います。

そしてその理念は私たち行政に係る人間が持つべきものとまったく同じです。

コロナ禍以外にも行政が取り組まなくてはならない課題は多く、町民の皆様の健康面での課題だけでも高齢者や障者者の皆様のケアを始め多くの課題があります。行政と新生病院が連携し、適切に町民の皆様を支えていく体制をこれから維持してまいります。

これから先も、100年、200年と地域医療の要として活躍されますことを切に願ひ、お祝いの言葉とさせていただきます。

創立90周年、おめでとうございます。

新生病院90周年を祝して



西原 廉太
日本聖公会中部教区 主教

新生病院グループ創立90周年、誠にめでとうございます。今から90年前の1932年9月9日、カナダ聖公会の支えによって、この小布施の地に新生療養所が創立されました。私は数年前にトロントにあるカナダ聖公会のアーカイブス进行调查いたしました。90年前当時の新生療養所設立をめぐるさまざまな文書、資料や写真を目の当たりにし、いかにカナダ聖公会のみなさんが新生療養所に対して思いを一つにし、祈りをささげ、期待をしていたかに震えるほど感動いたしました。

新生療養所は、初代所長となられたR・K・スタート博士の類い希な人格とリーダーシップと、職員たちの想像を絶するほどの献身によって、わずか数年の内に、その名は全国に知られたといえます。戦争という大きな困難を乗り越えて、1947年にカナダ聖公会との姉妹関係が回復し、スタート先生も再び所長として着任されさらにはL・パウ先生が婦長として参与され、より一層充実した医療施設としての歩みを始めたのでした。

新生療養所は1968年に「新生病院」と改称し、地域の人々に奉仕する病院としてさらなる発展を実現していきます。1985年には宗教学者から医療法人へと法人格を変更しますが、90年前から今に至るまで、新生病院が尊い祈りによって大切にされ続けていることに変わりはありません。

「地域社会へ貢献する新生病院」という理念は、その後より具体的な姿を見せ、小布施のみなさんの「ケア」と「奉仕」を担う基幹病院へと成長してまいりました。さらには、特定医療法人新生病院に加え、NPO法人パウル会、NPO法人ワンタイム、株式会社メイプルと、今や日本でも希有な、地域と密着した医療ネットワークが、今、ここに実現しているのです。

90周年はあくまでも新生病院グループの旅の一里塚の一つでしかありません。今後、100周年、150周年へとますます発展されて、主の御用にかなう器となられることを、心よりお祈り申し上げます。

90年、御支え下さった全ての皆さんに感謝して

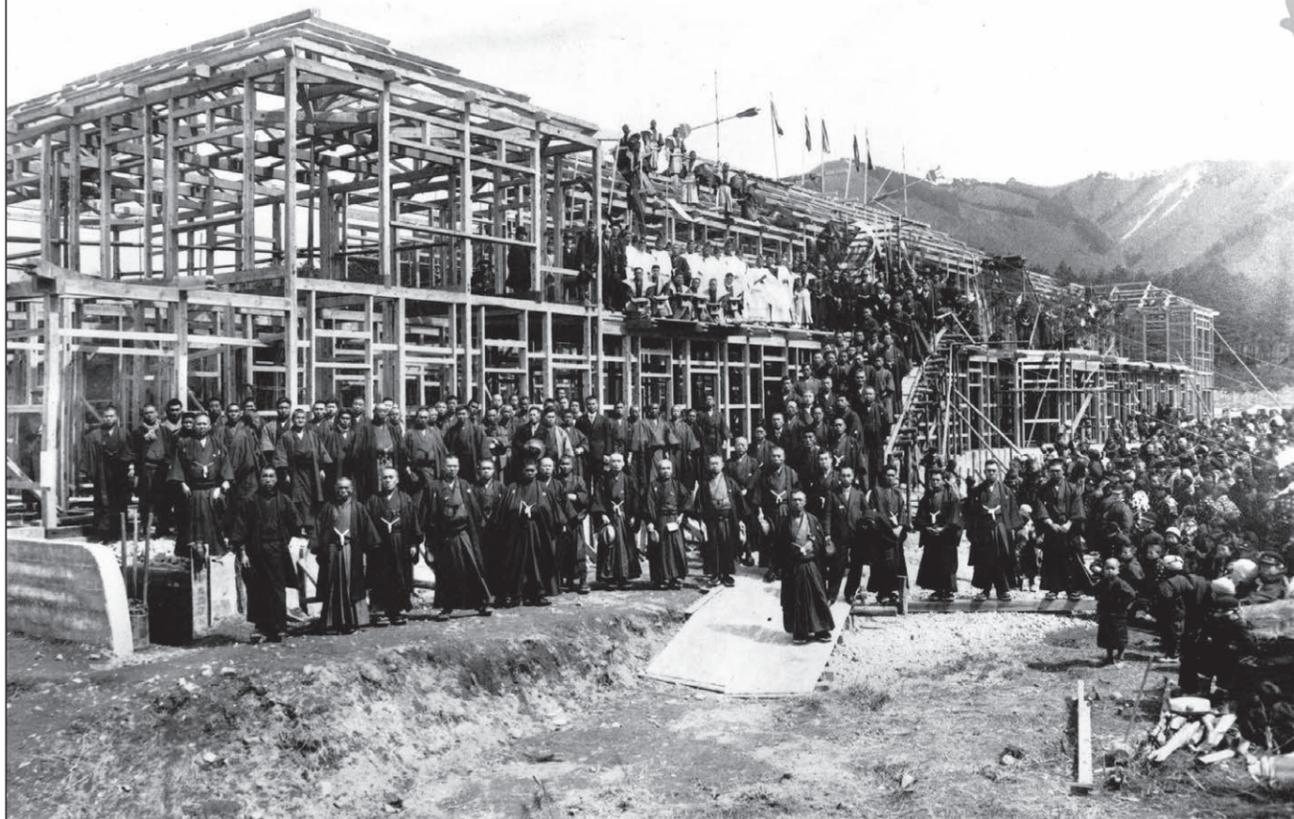


市村 良三
新生病院グループ90周年記念事業実行委員会 委員長

新生病院はカナダ聖公会の「布教」と日本に於ける国民病とも言われた「結核の撲滅」をミッションとして新生療養所を開設して90周年を迎えた。昭和7年は折しも、前年に満州事変を起し開所年には満州国建設という暴挙が成され、日本を巡る世界の目は厳しいものがあつた時代である。当然、キリスト教にも厳しい視線が注がれる中、カナダミッションは「結核患者には精神的なケアも必要」と昭和9年には、今や町宝でもある新生礼拝堂も建設した。全てカナダミッションの浄財である。この90年、初代院長R・K・スタート博士から現在の石井栄三郎院長まで、五代の院長はじめ、数多くの医師の先生方、カスリーン・A・ブッチャー、ミス・パウを嚆矢とする看護師の皆さん、技師の皆さん、大変な経営を支えられた事務方の皆さん、さらにはJ・G・ウォーラー師をはじめとするチャプレンの皆さんの献身的ご尽力に依つて支えられて来た90年であった。特に、昭和30年代から40年代には、特効薬の発明や、環境、栄養状態の改善から結核病院としての使命がほぼ終了。新生病院として再スタートしたが、45年にはカナダからの資金援助も打ち切れ非常に厳しいスタートとなった。医師不足も深刻であった。経営面からも勢い、病院の性格は老人ホーム的なそれに変わらざるを得なかった。そんな時に、遠い異郷の地バンガラデシでの医療活動を終えられ直接、小布施と言う寒村に志高い医師が赴任された。第十一代院長、内坂徹先生ご夫妻である。老人病院とも言ふべき新生病院を「地域に開かれた病院」「普通の病院」への転換を図られた。プライマリヘルスケアを唱えられ、患者の側に立つ医療の開始、院内に在宅介護センターを創り、在宅介護・診療をはじめ、日本では珍しかったホスピスも開設。両先生の人脈で新生病院を経て5つもの診療所が出来た。又、開かれた病院として「院内コンサートの開催」「レストランメイプル」等も創られた。現在の新生病院の礎を作られたまさに中興の祖といえると思う。

昨年は100年振りに世界を襲ったパンデミック、新型コロナウイルスが蔓延した。新生病院でもクラスターが発生、病院も大変な経営危機に陥った。この苦しい状況を石井院長はじめ先生方、渋澤一郎理事長はじめ経営陣、そして全スタッフの懸命な努力に依つて乗り越えられた。苦難の連続であった新生病院の正に面目躍如だと思ひ、敬意に耐えない。

新生病院は今、4つの法人格を擁して医療、介護、福祉、地域貢献の道を目指して大きく羽ばたこうとしている。目前に迫った100周年は勿論のこと、150年、200年と地域の皆さんの安心、安全をお守りくださることを心から祈念申し上げます。



棟上げ式の記念写真には大勢の村人たちが見物に訪れた

荒れ地に
植えられた
小さな種

新生療養所
誕生にいたるまで

新生療養所誕生前夜の日本

昭和初期、日本国内で結核が猛威を振るい、将来の日本を背負っていく若い命が次々に失われていきました。当時結核は「亡国病」と呼ばれ、日本政府や医療界の力だけではどうにも対処が行き届かない状況があったようです。

集められたたくさんさんの「心ある善意」

そのような日本の窮状は、日本の中部地方で宣教活動をしていたカナダの宣教師たちから本国に伝えられ、大きなミッションのうねりとなっていきます。

「100分の1の仕事（日本全国の結核患者すべてを救済することはできないが）でも我々のなすべ

き義務である」困っている日本人たちの必要を満たすために大人から子供まで多くのカナダの人々が自身の大切なお金を献金し、日本に結核療養所を建設し、そこで働く医療者を派遣すべく力をあわせました。募金目標として建設費2万5千ドル、維持費に年間3千ドルを3年間（合計3万4千ドル）で集められることとなりました。

教会の日曜学校に通う子供たちが、自分の欲しいものを我慢して貯めたワンタイム銀貨をピカピカに磨きお捧げしたことが様々な記録に残されています。一つひとつは小さいけれど、たくさんさんの尊い善意が大きく結集し結実したものが新生療養所でした。

結核療養所を受け入れた小布施町

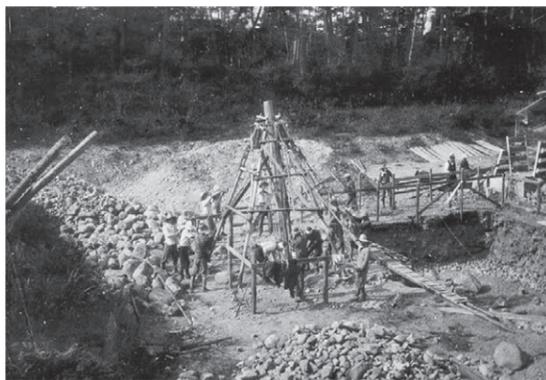
当事結核が忌み嫌われる時代にあつて、34番目の候補地（33番目までは結局どこも受け入れてくれず）としてカナダの人々の熱意を理解し、開設を受け入れてくれたのが小布施村（現小布施町）でありました。結核は命を脅かす疾患であつたため、当初は村内においても村民による非常に強い反対運動があり招致は難航しましたが、当時の池田文平村長の強いリーダーシップにより療養所開設の一

大事業は動き始めました。

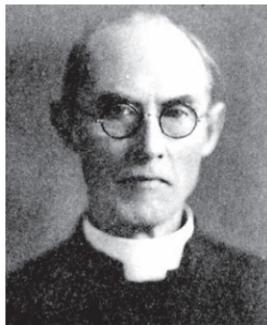
カナダから集まった心ある働き人

日本の窮状に心を痛め、直接自身での奉仕を志す若者達がおりました。

設立時に着任されたスタート博士、初代看護師長のミス・ブッチャー、教師を辞めて日本での結核看護を目指した二代目看護師長のミス・パウエル、看護師のミス・エリオット、婦人宣教師のミス・



松川の沿濫原であり、工事にあたり巨石との戦いであつた



ウォーラー
カナダ聖公会司祭



池田文平村長



二代目看護師長ミス・パウエル(左)と戦後来日したミス・ベンズ(右)



ミス・ブッチャー



スタート博士

フォステル。そして終戦直後の大変な状況下に来日した看護師のミス・ベンズ。

また、すでに日本で宣教の働きに励んでいた宣教師たちも療養所開設のために奔走することとなりました。どのスタッフも司祭も愛

情と信仰と豊かな人間性に満ちた立派な人財でした。気高い志をもった人間…、そして私たちと同じ人としての弱さや痛みをも持った生身の人間…、その人々たちを突き動かしたものは何だったのでしょうか。



喜びと希望に満ちた開所式

始められた献身的な働きと 順調な運営



このようなカナダの人々の想いが結実し1932年(昭和7年)、新生病院の前身である新生療養所がその歩みを始めました。

世界中から集まる最新の備品

開設にあたって当地域では類を見ない巨大なボイラーが設置されるとともに、イギリスからのベッド、アメリカからのレントゲンを始めとした最新の備品類が搬入され、療養所ではさながらクリスマスのプレゼントの包みを開くように歓喜に満ちてそれらを受け取った様子が伝えられています。

最新の結核治療の実践で 全国から患者が集まる

当事、結核の治療は「大気」「栄養」「安静」が三原則と言われて

スタート博士による診療風景



いました。

新生療養所ではこの三原則を順守するとともに、「横隔膜神経線除術」と「人工気胸」を併用した治療が行われていたので相当の治療効果を上げていました。この治療効果を聞き、かなりの遠隔の地から入所の希望がありました。開設当初用意された50床は間もなく一杯になり数年後には別館病棟が新築され85床を数えるところとなりましたが、その病床もまもなく満床となりました。

追加建設された別館病棟



「大気」「栄養」「安静」が重視される療養環境が提供された



カナダ聖公会が支えた 救済を旨とした医療

医療保険の全くなかった当時は、財産を食いつぶすような形で療養生活をしなければならぬ患者さんが大方であったようです。カナダミッシオンは病院の運営の条文中「入院患者の四分の一を全て施療(無料)とする」記載を加えてその事業を始めました。

この規定は1937年(昭和12年)の日中戦争勃発時まで遵守され、その経費の大半はカナダ聖公会から提供されていました。

干ばつ (大きな試練)

失われていくスタッフ

設立後、順調な働きを続けていた新生療養所は、近づく戦争の足音とともに運営がむずかしくなっていました。

1940年(昭和15年)には国際情勢悪化により、スタート博士他カナダ人スタッフは、本国へ引き上げざるを得ない状況に陥り、日本人職員だけでの運営が始まりました。

運営に必要な資金や物資をカナダ聖公会からの援助を前提にして

戦争による大きな困難



運営されていた療養所は大きな窮地に陥ることとなりました。1941年(昭和16年)に太平洋戦争がはじまり、残された日本人スタッフにも軍への召集が相次ぎ、運営の困難さはさらに加速するところとなりました。

受けた大病院や県への全財産を移管する圧力を伴った打診が複数件あったことが記録されています。医療機関としての他の団体への移管に留まらず、軍の「青少年錬成育成道場」として供することまで可否を問われるような状況であったようです。

何とか自主独立した運営は維持し続けて終戦を迎えましたが、終戦の直前には別館全体を士官の療養施設として強制的に海軍に占有される状況に至ってしまいました。

他の団体などへの接収や 移管の圧力

運営能力が極端にそぎ落とされた新生療養所には、政府の意向を

創立当時の新生療養所 全景



見送りの船上で。左端は二代目所長の伊藤加奈太博士



1943年、糟谷所長もフィリピンの病院へ召集された



戦争と火災を乗り越えて隆盛の時代へ



吸い寄せられるようになつた笑顔が再び集まった

戻ってきたカナダ人スタッフ

終戦の翌年には、カナダ聖公会からの物資の援助が再開されました。予告なしに進駐軍を通じて8,000ポンド分の食料（バター、ミルク、コンビーフなど）が贈られてきた記録も残されています。物資などの援助再開からさらに1年後の1947年（昭和22年）には、ミス・パウルやその他の宣教師たちが小布施の地に戻ってきました。この復帰も事前の予告なしであったとのことで、日本国内の混乱が收拾していない大変な状況であったこと、ミス・パウルや宣教師たちが急いで戻ったことを推測させる出来事でした。

新しい治療をたずさえて
スタート博士が復帰

1948年（昭和23年）にはスタート博士が復帰し所長に再度就任することとなりました。カナダより「ストレプトマイシン」を持ち帰るとともに「胸隔形成術」を開始し、結核に対する治療成績が飛躍的に向上することとなりました。

新しい受難と再建

カナダ人スタッフの復帰や新しい治療手段が開始されたこともあり、順調な復興が進んでいた1950年（昭和25年）、火災が発生し本館3分の2と厨房棟の全てが焼失してしまいました。火災現場の跡片付けには多くの町民が参加し、困難な時とともに



療養所時代の治療風景

支えました。
すぐに療養所再建の意思決定が理事会でもなされ、スタート博士自ら募金集めのためにカナダへ向かいました。カナダミッションから1,400万円、厚生省の援助金の400万円、個人寄付35万余円も含めて資金集めが進み、翌1951年（昭和26年）には建物の再建と平常運営の復旧にこぎつけました。

スタート博士の退任

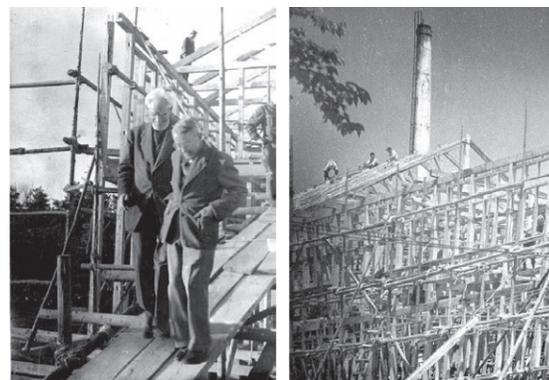
1953年（昭和28年）、スタート博士が任期満了にて帰国されました。退任間際は日本社会の中でもその学識が高く評価され、慈恵会医科大学の講師を兼任されつつ新生療養所で行われていた進んだ



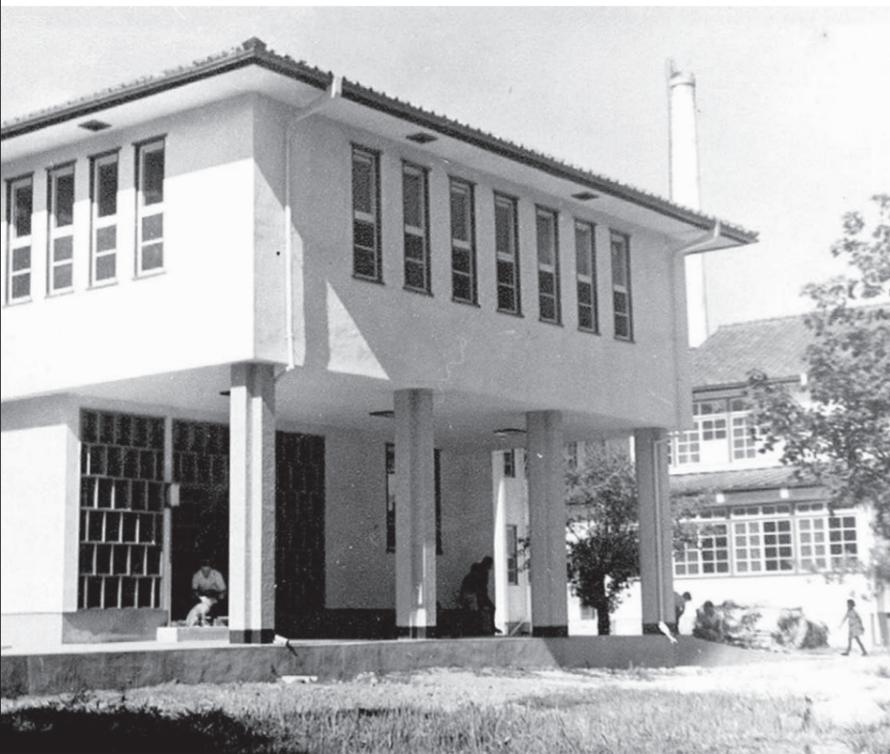
退任間近のスタート博士



1950年秋、秩父宮妃殿下が慰問に来所くださった



工事現場を見回るスタート博士（右）とパウルス主教



新築となった本館玄関は4本の柱がモダンな近代建築となった

教育面の社会的貢献と
治療棟の新築完成

治療技術を日本社会に広げていくことにも尽力されました。慈恵会医科大学からの報酬及び結核に関する論文出版の印税は「個人で受け取るべきものではない」とそのすべてを療養所に託していきました（後にレントゲン機器購入の資金の一部となる）。
穏やかな人柄とともに自己に厳しく公私の区別のけじめをつけるスタート博士らしい判断を最後まで続けられました。

この頃までには、結核治療や看護管理を学ぶため多くの医療者が全国から研修や見学に訪れるようになっていました。1956年（昭和31年）にはスタート博士が在職時から計画されていた治療棟が新築完成となりました。

経費1,052万円の大部分はカナダミッションからの援助により賄われました。
新生療養所の隆盛期といえる時代だったのかもしれない。

季節の
終わりと
落葉

結核の時代の終焉と カナダ聖公会からの自立

結核患者の減少と
病床の削減

戦後、様々な治療法の出現や進
化、そして栄養状態の改善により
時間の経過とともに結核患者の数
は減少へと転じていきました。
結核という病に対して向かい合
ってきた新生療養所の使命につい
て、結核そのものの社会からの減
少により再考を余儀なくされる状
況が徐々にではありますが大き
くなっていきました。

療養所においては一部の病棟を
一般病棟に転換し次の時代を見出
すための取り組みが始まりました。
潜在的結核患者の発見と早期治療
のためのクリニックを長野市内に
開所したのもこの頃の事でした。
クリニック開設にあたっては、六
車医師が所長、ミス・ベンズが看
護師として派遣されました。

ミス・パウルの定年退職と
ミッションの撤退

療養所設立の2年後に来日、そ
の翌年から総師長をつとめていた
ミス・パウルが定年を迎え帰国と
なりました。絶対的な存在感と信
念で療養所を支え続けた精神的支
柱がまた一人、結核患者の全国的
減少と時を同じくして療養所を
去っていかれました。

1970年（昭和45年）にはカ
ナダ聖公会からの人的、資金的援
助が終了となり、これからの療養
所のあり方について大きな変化を



療養所を長く支え続けたミス・パウル

新たな芽吹き

結核の病院から 地域密着型の医療機関へ



医療法人としての独立と
新病棟の竣工

経済的に自立した運営を続けて
いくことが必須の状況となり、
1985年（昭和60年）宗教法人
が開設運営していた病院事業を新
しく設立した医療法人に移管しま
した。

老朽化した結核病棟が新しい病
棟に立て替えられ、先ずは高齢者
を中心とした入院患者の入院治療
が精力的に行われることとなりま
した。そこから順次、現在の新生
病院グループの主要事業の数々の
取り組みが始められました。

療養所自身が考え、変化に対応し
ていくことが必要な状況となりま
した。

療養所から病院へ、
結核治療から
あたらしい使命の模索

1968年（昭和43年）には新
生療養所から新生病院へと改称が
行われました。

「結核の療養を行う施設」から「結



結核病棟から一般病棟へ転換が図られ、本館病棟も新築された

地域に必要な診療科の整備

高齢者の医療需要に因應するた
めの内科を基幹として、近隣の大病
院との役割分担をふまえながら、
外科、整形外科、小児科、口腔外
科、皮膚科、麻酔科等の常勤医師
も順次増員されていきました。決
して医師が潤沢に在籍していた状
況を経過してきたわけではありま
せんが、着実に高齢者のみならず
地域の若年層の医療需要にに応えら
れる体制整備が進められていきま
した。

また、1988年（昭和63年）
には健診業務（町民健診）にも取
り組みを拡げ健康管理部門の充実
も進めていくことになりました。
これらの動きに伴い、CTス
キャンやMRIを始めとした画像
検査機器や様々な検査機器の整備
も順次進められていきます。



1985年竣工となった新館病棟（現在の東棟）



宗教法人時代に
掲げられていた
病院の看板



かつてこの場所で長野のクリニックが開設された（長野市西長野）



ハングラデシュへの医療協力(現地スタッフと)



ボランティアによる生け花作品



現在の訪問看護は、この時代にその礎が築かれた



病院東側より見たホスピス病棟外観(現在の通所リハビリテーション棟)

緩和ケアへの取り組み

日本のホスピスムーブメントがまだ創生期であった当時、いち早く「ターミナルケア勉強会」が開かれ、臨床現場でケアにあたるスタッフ自らが看取りについての学びを始めました。

勉強会からスタートした取り組みが、多くの患者さんの看取りの実践を通して成熟し、1997年(平成9年)には長野県で一番早い緩和ケア病棟の開設認可に至りました。開設にあたっては国内の先進的医療機関の取り組みのみならず、イギリスやオーストラリアをはじめとした海外のホスピスにも医師や看護師を研修派遣して新しい事業に向かい合いました。

在宅医療への取り組み

「住み慣れた環境で人生の最後の大切な時間を家族とともに過ごしていただく。ご本人とご家族が望まれば看取りは自宅で」そんなことが普通にできる地域になっていくために病院が出来ることはないだろうか：そんな想いが職員の

中で共有されながら、1986年(昭和61年)から訪問診療や訪問看護が少しずつ始められ、将来に向けての取り組みが進められていきました。

介護時代の到来に向けた取り組み

ご家庭で介護を続けていただくために、病院で提供できる取り組みも順次拡大されていきました。病院の特殊浴槽装置を開放した「入浴サービス」の提供、「老人デイクケア」開設、「家庭介護講座」の開講、小布施町開設の「デイホーム」の受託など、2000年(平成12年)に創設される介護保険サービスの基盤となる取り組みを順次始めていきました。

ボランティア

提供する医療の内容を充実させていく一方で、患者さんに必要な療養環境を創造していくパートナーとしてのボランティアの育成や医療現場への参画も積極的に進

も着手し、病院が所在している地域以外の住民への支援にも取り組みが行われました。

オープンスペースの運営

地域住民と職員の交流をはかる場所として「オープンスペースメイプル(レストラン)」が病院玄関前に建設され、食事や喫茶の空間を共有するスペースが確保されました。結核療養所時代には疾病の特性上からも地域との交流は困難な状態が続いていましたが、このような場所づくりやチャペルを会場としたコンサートの開催などを積極的に行う事により、地域住民に病院を開放していく取り組みが増えていきました。

「カナダから助けられた私たちが、たとえ少しだけでもできることをお返ししていく取り組みを始めました。「ハングラデシュへのワーカー直接短期派遣」「カンボジアへのワーカー長期派遣支援」、アジアからの研修生(医師、看護師、リハビリスタッフなど)の受け入れ等の実績が積み重ねられました。

海外医療協力、被災地医療支援

また、地域で暮らす外国人労働者の健康を守っていくために他のボランティア団体と協力し無料検診を定期的開催する取り組みも繰り返されました。

阪神淡路大震災の際には医療スタッフを派遣する等被災地支援に



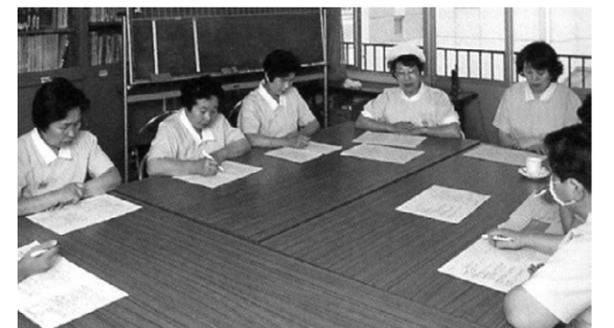
1990年開店の「オープンスペースメイプル」



オープンスペースでの職員の交流



ボランティアによる敷地内の環境整備



看護助手の院内勉強会風景

さらに深く
根を下ろす

公益性をさらに増しながら、 地域の医療機関の中での機能分化への取り組み



医療法人から特定医療法人へ

カナダの心ある人々の寄付によって新生療養所が開設され、その事業や資産を受け継いだ医療法人は、2003年（平成15年）、その公益性が認められ「特定医療法人（持分の定めがなく、かつ事業が医療の普及や向上、社会福祉への貢献、その他公益の増進に著しく寄与し、かつ公的に運営されていることにつき、一定の要件を満たすものとして、国税庁長官の認証を受けた医療法人）」の法人格を得ました。

私的な医療機関であることによりはありませんが、公的な役割を担う責任と社会的な認知が名実ともに大きくなる契機となりました。



特定健診



地域医療フォーラム



ミスバウル記念館



新生礼拝堂

療養所時代の建物が
地域のランドマークの一部に

療養所時代に建設された「新生礼拝堂」「ミスバウル記念館」が新生療養所に愛着をもつてくださる町民の熱心な推薦活動により小布施町の町宝に指定されました。

病院にとっては設立当初の「思い」に立ち返る場所であり、地域の住民や観光客にとっては「かつての新生療養所」と出会う場所として末永く大切に保存されることとなりました。

地域に支えられた 新しい医療の器づくり

療養所から一般病院へと大きな方針変換を行いながらその歩みを進めてきた新生病院がさらに大きな変革をすすめる、地域の必要に応

えていくためには、老朽化が進んだ既存の建物や設備では困難な状況が散見される状況に至りました。

2004年（平成16年）から2006年（平成18年）にかけて既存病棟の改築と新設病棟の新築工事が行われることとなりました。かつてカナダの人々に物心両面の支援を受け、この地に誕生し成長してきた新生病院ですが、この工事では小布施町を中心とする地域住民に支えられ、この後のさらなる成長に踏み出すこととなりました。

小布施町、須坂市、高山村、中野市、長野市など行政からの補助金、そして小布施町においては各自治会により住民からの直接的な資金援助が「寄付」という形で寄せられ善意に満ちた資金が集められました。



改築に寄せられた多くの方々からの善意の「寄付」

機能分化が明確に進んだ 病棟編成

改築新築された病棟は病棟編成を新たにし、四つの機能に明確に分化され、将来の超高齢化社会において新生病院の果たす役割が内外に判りやすい形態がとられました。「一般病棟36床（急性期病院と役割分担をしながら内科や整形外科の急性期疾患に対応する）」



西棟1階ホール南側の窓に飾られた
ステンドグラス



2006年竣工となった新棟玄関（西棟）

進む在宅医療

少子高齢化の流れが加速していく中、医療や介護の制度改革もそのスピードを増し、病院は「治療」及び「限定された一定期間の療養」

40床「療養病棟59床」「緩和ケア病棟20床」と、地域の他の病院より速いスピードで進む方向性の舵がきられました。



ホスピス屋上ガーデン

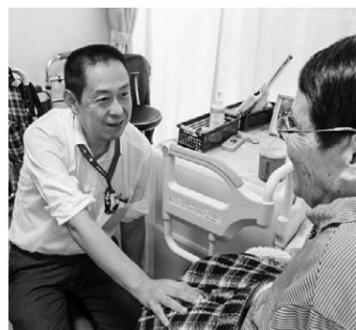


病棟でのリハビリ風景

の役割に限定して患者さんが留まる場所となりました。高齢者や慢性的な重度の療養が必要な患者さんの長期の療養や看取りは、大多数が在宅（自宅或いは自宅に準ずる場所）に移行してくる時代が到来しています。新生病院は訪問診療や往診などこの分野での地域へのさらなる貢献を目指して在宅医療の推進に努めています。



訪問看護先にて患者さんとの
ふれあいのひととき



訪問診療による在宅医療の推進

メイプル



移動販売



栄養士監修のお惣菜

NPO法人 ワンダタイム



海外医療協力



ボランティアによる植樹活動

NPO法人 パウル会



訪問看護の車輛



グループホーム



パウル会において拡大される様々な介護サービス(看護小規模多機能)

深く広く
根を張って

未来に向けての対応と 理念実現のためのグループ法人化



特定医療法人単独では
できない仕事をグループ化で
進める

自宅での生活を続けて
いただくために、今そして
これから必要なもの

地域の「員」として
協力しあいつつ

新生病院のみで、当地域の高齢者の在宅医療や地域での生活をお支えることは不可能です。

地域にはたくさんの方々の豊かな団体様や個人様が、熱心に高齢者やお困りの方々の支援をされるべく、日夜取り組みを続けられています。そんな皆様と協力し合いながら、地域社会に最善の体制を育てていくことが新生病院の務めと考えます。

しかしそのような努力を続けつつも、今後はそれでも埋めきれない社会的機能について、私たちのできる範囲には留まってしまうかもしれませんが、できる取り組みを進めていきます。

新生病院(特定医療法人)は基本的に、医療を提供することを旨として存在しています。

介護、福祉、生活の社会的支援の不足について、全てを病院単独でお手伝いしていくことは困難なことと認識しました。

そこで「看護・介護・福祉/NPO法人パウル会」「社会的な活動の場(仲間づくり含め)」の提供/NPO法人ワンダタイム「買い物や食事その他の生活支援の提供/株式会社メイプル」のそれぞれの分野について、独立した法人を設立することで、これからの地域において生じてくる様々な必要にこたえていくこととなりました。

NPO法人ワンダタイムは海外において医療や様々な支援を必要とされている方々、また日本国内においても災害に被災された方々に対する働きを続けていく役割も担っています。

地域社会にそして世界に…
創設者たちにならって

私たちのできることには限りがあります。地域においても(世界レベルにおいてはなおさら)視野を広げれば広げるほど、私たちのできることは小さな働きでしかありません。

私たちはこの事業体の創設者たちが100年以上前に世界の東の果ての国で起こっている結核の窮状を知ったときに「100分の1の仕事(日本全国の結核患者すべてを救済することはできないが)でも我々のなすべき義務である」と心に志を刻んだように、地域社会に目を向けて、そして世界へ目を向けてその尊い想いを絶やさないうように、未来に進んでいきたいと願っています。

ダーウィンの進化論+α

(+αは私たちの追加アレンジです)

最も強い者が生き残るのではなく、

最も賢い者が生き延びるのでもない。

唯一生き残るのは、変化できる者である。

ただし、「変えてはいけないもの」を守りながら…。(+α)



人の看護婦、生徒が二名でその歩みが始められました。この生徒のうち一人が後の聖路加国際病院の看護婦長と当該病院のみならず日本の看護界の礎を築いた

荒木いよでありました。

このころ長野の地において日本赤十字社長野支部が本格的な看護婦養成を東京本部の看護学校に委託し始めたころであった



看護婦の制服姿のミス・スミス

新生療養所設立の源流

新生療養所の設立についてはカナダ聖公会婦人伝道補助会がその主体的な役割を果たして成し遂げられました。しかし彼らの働きかけは新生療養所が設立される前から長野地域に熱心に行われていたことが記録に残っています。

新生療養所設立の36年前にあたる1896年(明治29年)、同会の援助によって、長野市県町に長野看護学校と長野慈恵医館が

設立されました。

その創始者として両事業のけん引役をつとめたのがカナダ人医療宣教師であるミス・ジョン・キヤメロン・スミス(以下ミス・スミス)でありました。ミス・スミスは当初、神戸で看護学校の設立に奔走していたようですが、様々な事情により舞台を長野に移しその情熱を傾けました。

長野看護学校

長野看護学校は教頭としてのミス・スミス、婦人伝道師二名、二

新生療養所設立に先立つカナダミッションの取り組み

～長野看護学校と長野慈恵医館～

プロローグ：1

評価を高めた防疫活動

ようです。また各都市の支部が三ヶ月ほどの短期間の臨時看護婦養成講座を開催し始めている状況でありました。ミス・スミスが始めた当該学校は、女学校の卒業生を主体として欧米に近い水準の教育レベルを目指す意図があつたようです。

長野慈恵医館

慈恵医館は困窮者への無料診療所であり、「慈恵医館記(開館趣意書)」には「英米両国の慈善心を持った人々からの寄付金でこの慈恵医館を設立し、貧しい人、連れ合いを亡くした人、孤児たちのために医療を行いますので、よく理解してきていただきたい」との記載が残されています。

またこの診療所は、将来的には前述の看護学校の臨床実習施設としての機能(20床程度の病床規模)も構想されていたようです。

しかしこの時代においては、当地においてもキリスト教伝道そのものが非常に迫害を受けていたので開業当時は患者が来院せず閑散とした状況であつた様子が伝えられています。

ミス・スミスの健康問題と事業のその後

精力的に看護学校や慈恵医館の運営を進め始めた1897年(明治30年)頃からミス・スミスに健康上の問題が生ずるようになりました。それまでに休暇帰国の機会があつたにも関わらず、それを中止して事業の立ち上げに奔走し続けていた結果でもあつたようです。

そしてついに1900年(明治33年)、自身の健康回復のためカナダに帰国せざるを得ない状況となり慈恵医館は休館、そして看護学校も閉校の止むなきに至りました。

そしてそれまでに集められた献金で彼女の念願であつた病院が建設されたのは1902年(明治35年)、看護学校の閉校により臨床研修施設として位置づけられる医療施設にはできなかつたようです。

ミス・スミスの時いた種の開花

ミス・スミスの人生をかけた取り組みによって時かれた種は、そ

に開花せしむ

○長野看護婦学校 長野縣町ある全校は客年十一月下旬神戸より移轉し來れるものにして教頭は英國人スミス女史、生徒は移轉前は九名もしも内三名は後任者と共に神戸に残し置きたれば目下は六名あるが何れも普通の學科を修め特に英語にも熟達して外國人の看護に應ずるも差支無し全校の始めて神戸に設立されたるは去る二十六年の十月にして昨年八月初めて二名の卒業生を出し日清戦争の起るや教頭は生徒を督して赤十字社の醫員を助け負傷將士の綑帯看護に盡力せしかば赤十字社總裁殿下及び神戸支部長より賞状と白絹と金圓を添へ教頭並に生徒に贈與せられたることもあるよしにて全校は當地の聖公會と關係あれども廣く公衆の爲にも需に應じ生徒をして看護の爲め出張せしむると云ふ當地方の爲め喜ぶ可きことなり

明治三十三年三月廿三日 信濃毎日新聞 信濃毎日新聞にて長野看護学校の開校について取り上げられた

の後様々な形で花を咲かせることとなります。

聖路加国際病院の礎を築いた主要メンバーの一人(初代看護婦長)として看護の世界で活躍した荒木いよは当該病院や大学のみならず日本の医療界、看護界に大きな足跡を残すこととなりました。

また、ミス・スミスが医療活動や看護教育を通して情熱を傾けた長野地方での働きが後の女性宣教師たちの当地での働きの源泉となり、その情熱の系譜が時を超えて新生療養所を生み出すうねりを生み出したものと考えられます。



長野看護学校第1回卒業式にて英語で答辞を述べた荒木いよ



長野市問御所にあつた慈恵医館

ミス・パウルの見つめていたもの ～人生を貫いた決意～



いつも厳しくそしてあたたかく見守り続けた現役時代のミス・パウル

日本の結核患者さんのために歩みだす決意

新生病院二代目看護婦長ミス・リアス・パウル(以下ミス・パウル)は、カナダのオンタリオ州クラントンにて生まれました。同州のモリス・ハイスクールに入学、そしてストラッド師範学校へと進み地元で教師の道へと進みました。小学校や中学校の教鞭をとり充実した日々を過ごしていたようでしたが、当時たまたま日本の結核患者の窮状を知ったミス・パウルは、日本に行つて結核看護に

奉仕したいとの願いを抱くようになったようです。心の中に生まれたこの志は着実に大きくなり看護学校とキリスト教伝道師養成学校を卒業後、10年にわたる教員生活にピリオドを打ち、結核看護に身を捧げるため渡日することとなりました。

ミス・パウルの家族は両親と弟妹でありました。看護学校とキリスト教伝道師養成学校を卒業したばかりのミス・パウルは、引き止める年老いた両親を説得して日本に来日しました。



職員との憩いのひととき(綱引きを楽しむミス・パウル)

戦争による八年間の足止め しかし日本での働きを 続ける決意

来日直後から慣れない言葉や生活習慣の中にあつても、所長であるスタート博士や療養所の多くの仲間とともに、日本で結核に苦しむ多くの患者を支えることに持てる力を注ぎこんでいたミス・パウルでありました。

1939年(昭和14年)6月、賜暇休暇にてカナダに帰国して



母国への一時帰国中、カナダ先住民の住む地域の病院で働くミス・パウル

いたところ、太平洋戦争(第二次世界大戦)が勃発し日本への帰任が叶わない状況に陥りました。この状態は1945年(昭和20年)に終戦を迎えても解消せず、何とか日本に帰任できたのは8年後の1947年(昭和22年)のことでありました。帰任時、戦後の混乱も相まって療養所へ事前の連絡が全く取れない状況で突然現れたミス・パウルの姿にその帰りを待ち焦がれていた日本人スタッフの驚きは私たちが想像できなかったくらいのものであったことと思われまふ。

カナダに留まっていた8年の間も、日本への帰任の意思を決して無くさなかつたミス・パウルでありました。その間にはカナダ先住民の住む地域の病院に勤務していた姿が記録されています。彼女の目がいつも見つめていたのは、恵まれた世界ではなく、より助

けを必要としている環境でひたむきに生き続ける人々であったのかもかもしれません。

母国以上に慣れ親しんだ 日本を後にする決意

人生をかけて日本の結核看護にあたつてきたミス・パウルも人生の秋を迎える年齢となり、慣れ親しんで母国以上の深い人間関係をつくつてきた日本にこのまま残りつづけるか、母国に帰還するか深く悩んだようです。

自身がこのまま日本に残つた場合、親しい友人たち(療養所の元患者、同僚等)に迷惑をかけてしまう事を一番に考え、愛着のある日本に別れを告げ母国へ帰還する決意を固められたように思われます。

別れにあたつてのメッセージ

※山彦会によつて作成された冊子より(ミス・パウルから寄せられたメッセージ全文)
※字句は原文よりそのまま掲載

今から思いますと、もう33年も前になります。初めてこの日本に来る話がありました時は、本当に嬉しくて忘れられません。新しい、大変美しいエンプレス・オブ・キヤナダ号でした。そして初めて、船の病氣もいたしました。

1934年6月16日横浜に着きました。あちらもこちらも目の前は一杯ばかりで何も読めず判りませんでした。そのときばかりでなく、それから後もずっと字や言葉がむずかしいと同様に、自分のことを相手の人に判つて貰うことが何よりも非常にむずかしいと思ひました。世界中の人々がお互い理解し合うためには、おなじ言葉であるのが必要だと沁々思ひます。そうすれば戦争も少なくなると思ひます。

その6月末、チャペルの開かれる式があつて、始めてハミルトン主教と御一緒に小布施に参りま

した。そのあと、患者さんの散歩の道を私も散歩したのですが、プロが多くて体中たべられましかつたのでしよう。

それから5年間、小布施ではたつきました。

1935年休暇でカナダに帰つたミス・ブッチャーが、そのあとスタート先生と結婚されて、困つてしまひ、急に私が婦長になりました。そのため日本語を勉強する時間がなくなりました。その後、ちょうど休暇でカナダに帰つていましたときに戦争となり、そのまま8年間カナダにとどまりました。戦後、教区は日本にゆづられていましたので、私は日本聖公会から招かれたわけですが、住む家があること、一年分の食料を持つてくるものが規則でした。一年分の食料を選ぶことに私は余り困りませんでした。カナダの北の方にいました

とき、1年に一度しか便がなく、1年分のものを一度にたくわえる生活をいたしましたから、そんな状態で、荷物をあげましたとき、ジャガイモから芽が出ていました。8年も小布施を離れていて帰つてきたのですが、昨日までずっと小布施にいた様な親しい気がしましたのは、不思議なくらいでした。

それからずっと今日まで振り返つてみますと、実に沢山な患者さん達がみんな勇氣と忍耐と協力と、そして親しみによつて次々と社会へ復帰し、幸福な生活に戻つて行かれましたことを、心に強く憶えております。長い間には勿論問題もありましたけれども、それを覆う程にみなさんの忍耐と御親切の数々を思いまふ。悪いお天気の日もありません。好いお天気の日もありません。小布施を中心とした信州の山河の美しさは決して忘れられないでしょう。

清々しい朝、静寂の夕、この自然の中に祈るとき、すぐ詩編121篇1節、2節(聖歌393)のことが胸に湧いて参ります。

「われ山に向かいて目をあげん、わが助けはいづこより来るべきぞ。
わが助けは主より來たる、主は天地を造りたまへり。」



退職帰国後に初来日されたミス・パウル(ミス・パウル記念館前のガーデンパーティーにて)

知られざる偉大な働き人

～久保田節子さんのあり方に学ぶ～

ひっそりと残されていた 追悼文集

新生病院に残されている歴史資料の中に、看護助手を務めていた久保田節子さんに関する記録(同僚職員による追悼文集)が存在しています。

久保田節子さんは結核患者さんの療養を支える仕事に心血を注いで従事され、33歳の若さで天国に召されました。

新生療養所の歴史は患者さんに真摯に向き合う数多くの誠実な職員によって積み重ねられてきました。

追悼文36名(患者や同僚等)中
一名分を以下に抜粋

節ちゃんの印象は弱々しく叢の陰に咲いているフリージアとでも言おうか、日頃その近くを歩いても気付かずに行き過ぎ、病になって倒れた時の陰に優しく咲いている花の恩恵に浴し初めてフリージアに気付く。それが節ちゃんの存在である。常に目立たず陰の何処かで一生懸命働いている、弱々しく見えても正義感と意志の強い人だった。だから悪いと思えば誰にでも抗議もしたし注意もした。節ちゃんは今よく働く。そして患者さんに親切だなどと今さら書く必要もない。

もつとも節ちゃんから受けた強い印象を記すことが一番良い追悼になるのではないだろうか。節ちゃんは今よく働く。そして患者さんに親切だなどと今さら書く必要もない。もつとも節ちゃんから受けた強い印象を記すことが一番良い追悼になるのではないだろうか。節ちゃんは今よく働く。そして患者さんに親切だなどと今さら書く必要もない。

で心からお詫びしたいと思っている。昨年の寒い風の日だった。ラジエターに蒸気が通っていて事務室も暖かくなったある日、何かの用で2階に上がって行った。私は冷たい風に横殴りに吹き付けられて驚き、窓の方を見ると開けた窓の下で風に吹かれて節ちゃんがせつせと患者さんの膿盆を洗っている。私は思わず「節ちゃん寒いなあ」と不平を漏らした。「ああ御免なさいつ」と言いながらドアを閉めた。風は私の方までは吹いてこなかったが、しかし節ちゃんは同じことである。私はドアの外から「節ちゃん、寒いでしょう。窓を閉めたらどう」と言葉がでた。「ええ、閉めたいけど戸が無いのよ」と言うので私はドアを開けてみた。冷たい風はビューと私に吹きつける。なるほど窓のガラスが半分なかった。それは私も知っているはずである。閉鎖の時、真っ黒に焼けてガラスのない戸に気付いたのだ。それは昔、私の入院している頃、ある夜勤の看護師さんが水の入っていない風呂に火を焚き危うく火事を出しそうになったことがあったとか。誰かに聞いたことがあったが、その後ビリビリにひびの入ったガラスは少しづつ取られて閉鎖の時に見た時は何もなく、黒く焼け残った骨ばかりになっ



在り日の久保田節子さん

小布施に戻ったスタート博士

～モザイク肖像として小布施に戻ったスタート博士が私たちに語りかけること～

リハビリ室前の モザイク肖像

新生病院のリハビリ室の前の壁にスタート博士のモザイク肖像が設置されています。

1991年この肖像は何の前触れもなく成田空港に送られてきました。山彦会(新生療養所時代の患者と職員の会)のメンバーによって通関手続き、木枠の作成、作者への御礼、新生病院への搬送等が担われ、以来この場所での新生病院の歩みを見守り続けています。



スタート博士のモザイク肖像

モザイク肖像の作者

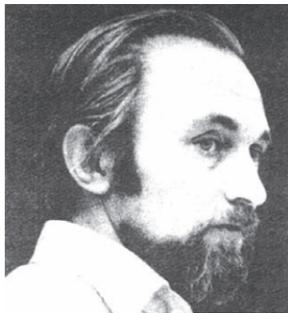
この肖像の作者は、ハンガリー系カナダ人で画家のチボウ・ナイラシ氏です。

同氏は、1956年のハンガ

チボウ・ナイラシ氏(モザイク肖像の作者)が残した言葉

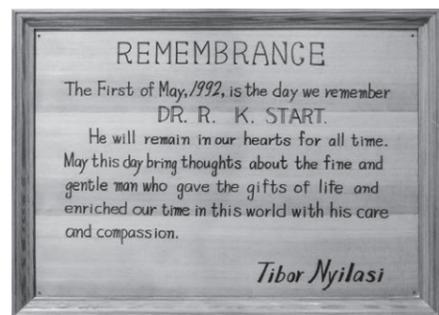
リー動乱の中からカナダに亡命し、冬のトロントの街頭で結核を発病しスタート博士が勤務されていたプラント・フォード・サナトリウムに救急車で運び込まれた時以来、スタート家との極めて強い縁に結ばれる運命を歩みま

くものを考え、深い精神の人でした。だからこそ、この肖像をモザイクで作ろうと思つたのは、この手法は、我々が等しくやがて帰るべき大地からの材料を用い、幾世代に亘つても、堅牢さを保つから



モザイク肖像作者のチボウ氏

2週間の日本旅行に私を連れていき、皆さんの美しい国と、14年間も働かれたサナトリウムを見せて下さいました。その上、斎藤鳳葉先生から墨絵を学ぶ機会を与えて下さいました。さらに私は、皆さんの建築や彫刻、公園や庭園に自然を配慮する優れた手法、そして季節や自然の美を取り入れた伝統の衣装なども見せていただきました。私はこの忘れ難い訪日に対してスタート博士に心から感謝しなければなりません。さらに付け加えて申し上げます。ればならないことは、日本の方々は皆、非常に親切で精神の美しい人々であったことです。』



追憶

5月1日は、Dr. R. K. Startの記念の日。彼は何時も我らの心に生きる。この日こそ、我らに生命を与え、その配慮と慈しきで、我らの人生を豊かにした素晴らしい紳士をいつまでも思い出す日であることを。

Tibor Nyilasi

モザイク肖像下に設置された作者からのメッセージ

新生病院歴代院長

年号は着任した年

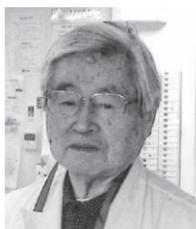
地域と共に、小布施と共に

- 初代
1932(昭和7)年～
R・K・スタート
- 第二代
1940(昭和15)年～
伊藤 加奈太
- 第三代
1942(昭和17)年～
糟谷 伊佐久
- 第四代
1944(昭和19)年～
平川 良三
- 第五代
1948(昭和23)年～
R・K・スタート
- 第六代
1953(昭和28)年～
六車 方中
- 第七代
1962(昭和37)年～
竹重 正生
- 第八代
1970(昭和45)年～
長野 孝暢
- 第九代
1977(昭和52)年～
長嶋 長節
- 第十代
1982(昭和57)年～
荒木 伸
- 第十一代
1986(昭和61)年～
内坂 徹
- 第十二代
1999(平成11)年～
佐藤 裕信
- 第十三代
2012(平成24)年～
宮尾 陽一
- 第十四代
2017(平成29)年～
大生 定義
- 第十五代
2021(令和3)年～
石井 栄三郎



名誉院長
1995(平成7)年～
橋爪 長三

創立90周年 おめでとうございませう



名誉院長
橋爪 長三 先生

私は橋爪長三の娘で、一時期新生病院の総務課で働かせていただいております。父が病院の廊下を咳払いをしながら歩く姿が今でも目に浮かびます。

父は長野県立リハビリテーションセンターを定年退職後正式に入職しました。父はクリスチャンで、こちらで働かせていただけたことは喜びでした。神様に用いていたいただき、生き生きと朝から夜まで働きました。

診察では患者さんお一人お一人の希望や不安をじっくりと聞き、丁寧に説明をしました。次の順番の患者さんの待ち時間がほとんど長くなり、看護師の皆様が休む間もなく父を助けてくださいました。診察が終わると次は手術、手術のない日は回診です。手術は一日に何件も行いうこともあり、終わるのが夜遅くなることもたびたびでした。オペ室と一緒に助けてくださる先生方や看護師の皆様が一つのチームと



執筆者
服部知子様
続柄:長女

なつて、本当にハードな中支えてくださいました。回診もゆつくりで、父は患者さん思いですがマイペースな人です。病院の様々な職種の方が助けてくださったおかげで働けました。心より感謝申し上げます。もともと新生病院にはとても暖かい雰囲気があり患者さんに優しい病院だと思います。

父が難聴になり「もう引退したほうが(患者さんや病院のために)よいのでは」と言いましたが本人はなかなか踏ん切りがつかず、そんな時期病院の皆様が何度も父のためにホテルでパーティを開いてくださったと聞きました。こんなご配慮をしてくださる病院は他にありません。感謝申し上げます。

大好きな新生病院で皆様と一緒に働き、多くの患者さんと出会うことができ、また念願だったバン格拉デシユでの医療奉仕もでき、本当に父は恵まれていたと思います。ありがとうございます。新生病院グループの一層の発展をお祈りしております。

父糟谷伊佐久の思い出



第三代
糟谷 伊佐久 先生

私の父糟谷伊佐久は、早稲田鶴巻町の開業医の家に生まれました。クリスチャンだった父親(私の祖父)が「イサク」と名付けました。父が3才の時、母親私の祖母は結核により26歳の若さで天国へと召されました。その仇討ちを志し、慶応大学医学部に進み、呼吸器内科を選びました。

卒業後、聖路加病院に勤め、日本女子大学の近くで同じく医院を開業していた家の娘であった母と結婚しました。長女のぶを頭に5人の子が誕生しました。

大東亜戦争が始まり、スタート先生がカナダへ伊藤先生がアメリカへ帰られたため、聖路加病院院長の橋本寛敏先生の命を受け、昭和17年5月、父は家族と共に小布施の新生療養所へと赴任しました。しかし、すぐに東京へ戻れるだろうということで、小学5年生だった私だけ成城の祖母の家に預けられました。夏休み・冬休みには私も小布施に来て、家族と過ごしました。兄弟姉妹と療養所の林を駆け回り、小川で泳いだ日々は、キラキラと輝いて胸によみがえります。本当に楽しかった。



執筆者
岩崎しのぶ様
続柄:長女

戦争が激化してきた昭和18年11月、父は陸軍中佐相当官という位で、革の長靴に長剣を下げ、岐阜県各務原市の飛行場から重爆撃機でフィリピンのマラにあつた日本病院の院長として出征しました。私も小学6年生の11月、小布施の家族の元へ戻り、皆で母を助け、父の留守を守りました。マラも市街戦となり、父は婦女子を連れ山の中を逃げたそうです。タロイモを掘っては空腹を凌ぎ、山道ではスコールの濁流に流されたりと、苦難の逃避行だったと話してくれました。終戦を迎え、一時は捕虜となりましたが、ようやく解放されて父は日本に帰って来ました。

療養所の職員・患者さんに迎えられてほつとして、「もうずっと小布施に居る」と言っていた父でしたが、国立東京第二病院(現 国立病院機構東京医療センター)の西野院長の誘いを受け、又東京へ行くことになりました。家族も後から上京するのですが、父も母もなんとか大好きな小布施との繋がりを作っておきたかったので、18才の私は当時新生療養所(パンの配達で出入りしていた小弥太と教会で式を挙げる)になりました。またもや私だけが一人、小布施に残ることになったのです。

あれから70年も経ってしまいました。小弥太は一足先に天国へ行ってしまうましたが、私は今も両親の愛した小布施で幸せに暮らして居ます。

私の幼いころ



第六代
六車 方中 先生

母が生前元気な頃に聞いた記憶をたどってみますと、私は生まれてまもなく新生療養所の入り口の建物、1階が娯楽室、2階が男性職員の方の住まい(寄宿)で、その娯楽室の隣に住んでいたのです。ここは日当たりが悪く子供にはよくなかったことで、昼間は、こおり(荷物入れ)に私を入れ、母が病弱だったことで看護婦さん達の寄宿へ父が出動前に預けに行きました。そこで私は過ごしていたようです。

そのうちにスタート先生が、私たち家族を気の毒に思われて社宅を建てて下さいました。

その家はすぐ病室が見える所でしたので、患者さんが急変すると看護婦さんがベランダからよく父を呼びに来たものでした。

余談ですが、夕食の秋刀魚を外で母が七輪で焼いていると、おおいが患者さんの部屋に流れ込んで、翌日父が病室に行くと患者さん達が



執筆者
六車 妙子様
続柄:長女

ら「先生、昨日の夕飯は「秋刀魚」だったでしょう」といわれたそうです。患者さんの多くは、聖路加病院からの紹介で小布施のサナトリウムに来ていました。

私は全国を旅などしたことはありませんが、美味しい食べ物の味を知ることができました。それは入院患者さんの御両親が各地から、お見舞いに見えた折、我家はしばしば宿となり、お泊りになりました。名産だけではなく患者さんの故郷のお話を伺いながらの夕食は、私の何よりの楽しみでした。

全国のことを知る機会を神様から与えられたものと思います。

サナトリウムと教会が隣り合わせの病院に勤務していた父に感謝します。

新生礼拝堂は私に色々な事を教え、多くの懐かしい人々、その交わり、幾多の喜びと思いつく心の中に残してくれた心のふるさとです。

新生病院の思い出



第十一代
内坂 徹 先生

人は新しい出会いを通して成長させられます。

新生病院での日々は感動したり、感謝の祈りを捧げた日々でした。

小布施に赴任したきっかけは、パングラのダッカハウスでの出会いからでした。元中部教区植松主教の息子さんが、ダッカにあったテゼ修道会のプラーザー達の集いに来られていて、私もテゼの集いに参加させていた。縁で小布施に来ることになりました。子供たちも世界の国々をあちこち旅行していたので、その内の一つの国のひとつの場所に、今回は長く滞在することになるという感じでした。

その当時、病院は158床あったので毎日2人(医師である妻と)で朝から晩まで仕事をしていました。夕食を作る時間もなく、毎晩、水藤司祭夫婦がパーベキュー等をして食事の準備をして下さり、本当に感謝でした。信州におけるホスピス運動を始

めたのも、新生病院でのことでした。様々な素敵な人々との出会いがありました。今も先に召された人々の顔が何人も思い出されます。

オーストラリアのパスからブラン女史が訪ねてきて下さり、私たちを指導して下さいました。私も感謝です。パースでの先駆的なホスピス運動では、より多くの事を学ばせていただきました。職員100人を超えるボランティアの人々が働いていました。キリスト教精神に基づくボランティア精神が根付いていて今もしっかりと活動している姿を見て感動しました。又30年前に日本で働いていたオーバーステイの人々の医療問題に取り組む活動には、外国人無料検診で、長野の教会だけでなく、一般ボランティア、長野各地の病院スタッフみんなが協力して下さい、秋の健診の季節には日曜日が無い年が長年も続きました。

素敵な人々との出会いを通して人間として成長させられたと思っています。

私の尊敬する友人である、伊藤邦幸先生(ネパールで働いていました)から、喜びの時は人は広くなり、悲しみ、苦しみ時は人は深くされるものだを教えていただきました。

新生病院での多くの素敵な人々との出会いをとっても感謝しています。

創立90周年おめでとうございませう



第十二代
佐藤 裕信 先生

2010年には長野県初のVer6.0の更新認定を受けました。この時も皆で喜びを分かち合う事が出来ました。

勿論、橋爪先生、榊原先生、寺島先生、酒井先生など名外科医が揃っていましたので、日々全力麻酔医としても働かせて頂きました。又、海外医療協力、町の検診受け入れ、禁煙外来、睡眠時無呼吸症候群(SAS)外来、小布施町健康づくり研究所などを立ち上げ、職員と一緒に学び色々な方々に協力して頂きました。職員間の交流、親睦も盛んに行い、新年会や忘年会、職員旅行やパーベキュー大会、職員の家族も交えての楽しい思い出が沢山あります。病院祭やボランティアの方々との交流も忘れられません。コロナ禍の今となっては貴重な事だったと改めて思います。13年間、院長として働いた事は私の誇りであり人生の宝物です。またそれを支えて下さった職員の方々、関わって下さった全ての方々に感謝申し上げます。病院の庭に植えられた桜の樹々のように、神さまに守られ新生病院の幹が年々太くなり花を沢山咲かせますよう祈っております。

創立90周年おめでとうございませう



第十三代
宮尾 陽一 先生

持っているかを実感していただきました。住民の皆さんの信頼を得るために在宅部門を強化し、須高地域のみならず中野市全域と湯田中や長野市の一部まで出向くこともありました。これには経験豊富な山本先生の行動力が強力な推進力でした。

地域での役割は周辺に急性期の病院がいくつある中で、それらの病院と診療所の先生方や介護施設を結びつけるハブ病院と位置づけ臨床や介護の様々な分野で研究会や講演などを通して交流を図りました。須高医師会をはじめ地域の先生方を定期的に訪問し、信州大学にも足繁く通いました。歴代院長の中で信大を訪れた回数はおそらく一番多いと思います。「チームで行こう」という言葉を標語にして各職種の自主性を育む工夫を凝らして職員が楽しく誇りをもって働ける病院を目指しました。その日々の中で自分自身もみんなと楽しく働くことが出来て懐かしい思い出がいっぱいです。院長として支えていただいた多くの方たちに今も感謝しています。これからも歴史ある新生病院の健やかな成長を祈ります。

私が新生病院に院長として赴任したのは、冬季長野オリンピックが開催された翌年1999年でした。森主教、唐沢理事長の強いお誘いではありましたが、家族、友人は全員反対という厳しい状況の中、麻酔医として臨床専門で過ごしてきた私が病院運営を担っていいのか、不安と緊張で身の引き締まる思いで赴任したのを覚えています。

院長としての激務は想像以上に、今思い出しても良く勤まったものだと思います。2000年に介護保険制度が始まり、そのための勉強や、2004年には改築工事に向けて会議、会議の連続。2006年に竣工、式典、祝賀会、大切な患者さん達の新病棟への移転など職員が一丸となって取り組みました。10月に日野原重明先生の竣工記念講演会を行い、関わった全ての方々と喜びを分かち合いました。2005年に病院機能評価の認定を受け、

新生病院90周年を祝して



第十四代
大生 定義 先生

これからの地域医療、時代が求める医療のモデルとなっていく新生病院、誇るべき歴史と由緒ある新生病院。私は第14代院長として関与することができ、大変有難く感じている。これからの計画・方針や本院の歴史については他所で大きく取り上げられるだろう。ここではこれら大きなテーマではなく、些細ではあるが、思いがけない、個人的なかわりを少しだけ述べて頂きたい。

私と聖公会の縁、新生病院との縁

私の臨床研修病院は米国聖公会宣教師トイスラー博士が1901年創立した、聖路加国際病院であった。私の研修開始は1977年4月で、翌5月にスタート博士が緊急入院した。先生が内科で緊急処置を受けていた時に、私は内科研修医として外科のローテーション中であった。同じ建物にいた日があった。

のである。もちろんこのことは、後年新生病院に入職、「久遠の光」を讀んで判明したのだが。

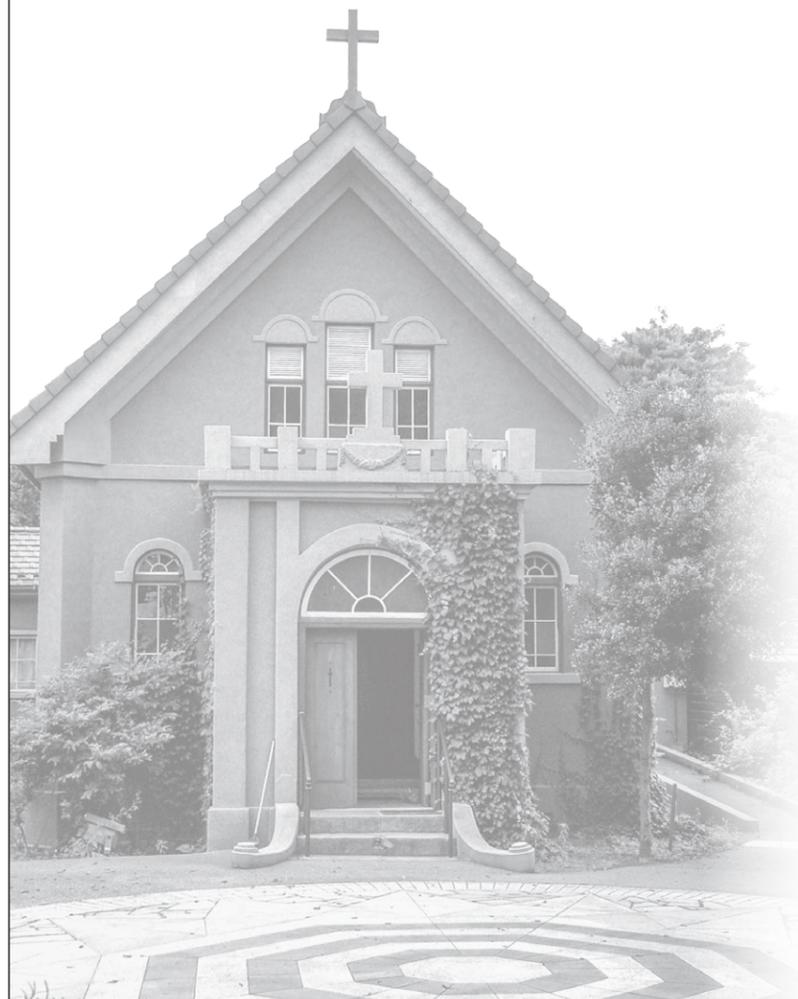
新生療養所と聖路加の交流もあった。1935年から看護学生が4週間の実習に交代で赴いたことが「聖路加看護教育の一〇〇年」に記述されている。さらに聖路加女子専門学校1931年卒業生が2名、新生療養所に入職。河辺秀雄医長も出張診療した記録もある。河辺先生は私が研修医の頃はまだ患者の診療にあたっていた。高齢患者の胃がんの手術適応についてフラットな風土もあって、私はついつい生意気に意見を述べ、河辺先生がそれを取り上げてくださったことを憶えている。また、私の本院入職前の勤務先はこれも聖公会設立の立教大学であった。

自分自身の成長と病院変革の併走

私は、入職前には種々の経験もあり、頭では総合医としてのマインドは持っていたつもりではいた(http://www.jstage.jst.go.jp/article/jant/34/3/34_241/pdf/-char/ja)が、入職しばらくの間は、なかなか急性期病院専門医の感覚が抜けていなかった。少しずつ時間がたつうちに超高齢化社会の我が国で、医療・介

護などの分野で本院が以前からすでに先行して進めていく方向性や果たすべき役割を学ばせてもらった。さらに組織運営・職場風土の変革についても関わらせて頂き、勉強になった。

過程を振り返ると「少年老い易く学成り難し」を痛感する。しかし、思い直して「明日死ぬかのように生きよ 永遠に生きるかのように学べ」で過したい。



語り継ぐ90年

《年譜》

年号	新生療養所・新生病院(日本聖公会・中部教区)	備考	人物	建物	社会の動き・できごと
1919 大正8年	○カナダ聖公会婦人宣教師が結核療養所建設に言及				
1926 大正15年 昭和元年	○カナダミッション(カナダ聖公会在日宣教師団)の代表者ハミルトン主教が帰国し、直接説明と要請。首座主教より募金キャンペーンの許可が与えられる。 ○カナダ全国の信徒に対する募金活動開始 *目標額/建設費25,000ドル、維持費年3,000ドルを3年間				
1928 昭和3年	○R.K.スタート(以下、スタート博士)カナダオンタリオ州キングストン・クイーンズ大学医学部を卒業し、ロンドン市クイーン・アレキサンドラ療養所に就職。結核及び胸部疾患研究開始。かねてより要請のあった日本における結核療養所への派遣を受諾する				
1929 昭和4年					世界大恐慌
1930 昭和5年	○カナダミッションの療養所建設委員ウオーラー司祭が中心となり候補地探しが進む。小布施村が候補地の一つとしてあげられ協議が開始される。スタート博士来日し軽井沢にて語学研修開始	年末、小布施村に結核療養所建設を申請			世界恐慌の波及により昭和8年頃まで
1931 昭和6年	○2年間にわたる候補地探しの末、小布施村に療養所設置が決定。この年までに募金目標とされていた25,000ドルが集まる				9月18日 満州事変勃発

戦争による大きな困難【干ばつ（大きな試練）】

年号	1939 昭和14年	1940 昭和15年	1941 昭和16年	1942 昭和17年	1943 昭和18年	1944 昭和19年	1945 昭和20年
○ミス・パウル休暇帰国（帰国中に戦争勃発、帰任ならず）	○国際情勢悪化により、スタート博士他カナダ人スタッフ・宣教師本国引き上げ（昭和15年暮れ） 戦時色強まり、療養所経営も次第に困難になる	○太平洋戦争勃発 日本人職員の召集統出	○療養所その他団体への移管等の圧力が複数生ずる 戦時色強まり、経営が次第に悪化 伊藤加奈太所長、療養所経営を断念、療養所は次の道をたどる 聖路加病院より糟谷伊佐久所長来任	○11月 糟谷伊佐久所長応召（フィリピン・ケルン病院） ○聖路加病院との統合、あるいは日赤、長野県への移管等いずれも不成立。独立した運営が継続することとなる。	○3月 平川良三所長就任 ○4月 六車方中医師着任 ○5月 スタート博士不在中の住まいを「ホーム」という作業療法の施設として使用	○6月 軍の指令により別館全部を海軍士官の結核患者に開放 野比海軍病院より25名の将校患者疎開入院 ○8月 太平洋戦争終戦	
備考							
人物	総師長代行／ ミス・エリオット （1940年暮れまで） チャブレン／ 神崎永生	所長／伊藤加奈太 チャブレン／ セバリー	事務長／浅野英司 チャブレン（管理）／ 相沢誠四郎	所長／糟谷伊佐久 事務長／北川千秋	チャブレン／ 豊岡陸郎	主教／大西狷介 理事長／大西狷介 所長／平川良三 事務長／高科重雄 チャブレン／ 相沢誠四郎 （豊岡司祭出征中の対応）	
建物							
社会の動き・できごと	4月8日 宗教団体法成立 9月1日 第二次世界大戦勃発	4月1日 宗教団体法施行	12月8日 太平洋戦争勃発				8月6日 広島原爆投下 8月9日 長崎原爆投下 8月15日 太平洋戦争敗戦、第二次世界大戦終結

始められた献身的な働きと順調な運営【萌芽期】

年号	1932 昭和7年	1933 昭和8年	1934 昭和9年	1935 昭和10年	1936 昭和11年	1937 昭和12年
○1月 小布施村池田文平村長に療養所建築申請書提出 ○2月 建築着工 ○落成式 療養所開所（9月9日） ○設立記念日を10月18日と定める	○理事会を構成し、運営規則決定。所有者はカナダミッション。 【医療設備】 放射線機器（アメリカより）、ベッド（イギリスより） 【医療技術】（全国に先駆けて採用） 横隔膜神経捻除術 人工気胸術、人工気腹術 【建物総工費】 49,956円91銭（カナダ聖公会支払い）、付属住宅建設費9,521円77銭、備品費用不明	○ミス・リアス・パウル（以下ミス・パウル来日） ○新生礼拝堂竣工 ○順調な入院患者の増加が続く	○別館、旧マリア館、職員住宅等新築	○新生礼拝堂会衆成立、教会として認められる	○【施設】 手術室改装 ○伊藤加奈太博士「結核常識読本」を出版	【入所患者数】 163名 【患者治療平均日数】 164日
備考	【入所患者数】 12月31日時点で34名 【職員数】 若松医師、日本人看護師3名、総勢20名少々 【ベッド数】 10月：50床 12月：65床 【入院費】 一日あたり1円50銭均一	【入所患者数】 43名 【入院費】 4月： 一日あたり2円・3円・4円に改正（ただし洋食の場合は7円）	【ベッド数】 85床			
人物	主教／H・J・ハミルトン 理事長／H・J・ハミルトン 所長／ リチャード・ケンプ・スタート 総師長／カスリーン・A・ブツ チャブレン 事務長／中村正義 J・G・ウオーラー	事務長／秋山英一	主教／佐々木鎮次 理事長／佐々木鎮次 総師長／ミス・パウル チャブレン／ H・G・ピヤシー		チャブレン／ P・S・C・パウルス	
建物	1932年竣工 療養所本館（北側）安閑	1932年竣工 療養所本館（南側）	1935年竣工 療養所別館（南側）			
社会の動き・できごと					2月26日 二・二六事件	7月7日 日中戦争勃発

結核の時代の終焉とカナダ聖公会からの自立【季節の終わりと落葉】

年号	1946 昭和21年	1947 昭和22年	1948 昭和23年	1949 昭和24年	1950 昭和25年	1951 昭和26年	1952 昭和27年	1953 昭和28年	1955 昭和30年
新生療養所・新生病院(日本聖公会・中部教区)	○カナダ聖公会からの援助再開 夏、予告なしに進駐軍を通じてカナダミッシェンより8,000ポンド(約3.6トン)の食糧が贈与される(ハター・ミルク・コンピーフ・キャンディ等)	○6月 予告なしに復帰最初のミッシェン宣教師として、キャノン・パウルス、ミス・フォステル、ミス・パウエルが小布施に到着(パウルス司祭はご夫妻にて来日) ○1947年8月〜1948年8月 全館一時閉鎖(荒廃した建物改修のため)	○5月 回復者及び現旧職員による親睦組織として「山彦会」結成 ○8月 スタート博士家族と共に来日、所長再就任 ○ストレプトマイシン使用開始、胸隔成形術開始 ○10月 療養所再開感謝礼拝。午餐会開催	○カナダ聖公会からの財政援助再開 ○春 ミス・ベンズ来日	○4月 火災発生により本館2/3と厨房棟焼失 カナダ聖公会で療養所再建のための募金キャンペーンが行われる 焼け残った別館20床に女性患者のみ残り、男性患者は国立東長野療養所へ転院。本館復旧まで週1回の出張回診を行う 復旧着手 ○9月 秩父宮妃殿下慰問に来所	○9月 カナダ聖公会からの復興資金1,400万円、厚生省援助金400万円等により復旧 本館復旧完成、平常業務に復す	○宮本忍博士を招いて、肺葉区域切除術始まる(昭和35年まで) ○スタート博士、慈恵医大の講師を数年間務める(期間不詳)	○スタート博士任期満了にて帰国	○治療棟新築完成(経費1,052万円)の大部分はカナダミッシェンからの援助 【新築経費】 10,525,227円(設備費含む)
備考								【ベッド数】 10月 118床(一般16床、 結核102床)	
人物	チャブレン/ 豊岡陸郎	総師長/ミス・パウエル	補佐主 P. S. C. パウルス 所長/ リチャード・ケンプ・ス タート			チャブレン(臨時)/ 箭野清作 (豊岡司祭留守中の対応)	所長/六車方中 チャブレン/ 豊岡陸郎		主教/黒瀬保郎 理事長/黒瀬保郎
建物									
社会の動き・できごと	11月3日 日本国憲法公布								高度経済成長期 (1955年〜1970年)

戦争と火災を乗り越えて隆盛の時代へ【成長と結実】

年号	1955 昭和30年	1956 昭和31年	1958 昭和33年	1959 昭和34年	1960 昭和35年	1962 昭和37年	1963 昭和38年	1964 昭和39年	1966 昭和41年
新生療養所・新生病院(日本聖公会・中部教区)									
備考									
人物						所長/竹重正生			総師長/天野寿恵 (1969年3月退職)
建物									
社会の動き・できごと					9月26日 伊勢湾台風			10月10日 第18回夏季オリンピック 競技大会が東京で開幕	



1951年 火災焼失から復旧
「療養所本館」南側



1955年 火災焼失から復旧
「療養所本館」北側

結核の病院から地域密着型の医療機関へ【新たな芽吹き】

年号	1967	1968	1969	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1980	1981	1982	1983	1984	1985	昭和59年	昭和60年	
備考																					
人物			院長/長野孝暢	院長/小笠原重二 理事長/小笠原重二 院長(代行)/ 河西健男										チャプレン/ 木島徳治	院長/荒木伸	事務長/竹内吉正			総師長/湯本タマ江		
建物																					
社会の動き・できごと		6月26日 小笠原諸島返還 12月10日 三億円事件	7月20日 米アポロ11号月面着陸	3月15日 日本万国博覧会が大阪で開幕	3月26日 バンングラデシュ建国	2月3日 第11回冬季オリンピック競技大会が札幌で開幕	2月19日 あさま山荘事件	5月15日 沖縄本土返還	オイルショック	7月 ロッキード事件	8月12日 日中平和友好条約締結	9月22日 イラン・イラク戦争勃発	9月22日 イラン・イラク戦争勃発	3月20日 神戸ポートアイランド博覧会(ポートピア81)開幕	2月8日 ホテルニュージャパン火災	9月1日 大韓航空機撃墜事件	3月 グリコ・森永事件(1985)	9月14日 長野県西部地震	3月17日 国際科学技術博覧会(つくば万博)が茨城県つくば市で開幕	7月26日 長野市地附山地すべり災害	8月12日 日本航空123便墜落事故

結核の時代の終焉とカナダ聖公会からの自立【季節の終わりと落葉】

年号	1967	1968	1969	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1980	1981	1982	1983	1984	1985	昭和59年	昭和60年
備考																				
人物																				
建物																				
社会の動き・できごと																				

年号	新生療養所・新生病院(日本聖公会・中部教区)	備考	人物	建物	社会の動き・できごと
昭和61年	<ul style="list-style-type: none"> ○10月 病院施設を利用した入浴サービス開始 ○11月 訪問診療開始 ○町デイクアに協力(理学療法士の派遣)開始 		院長/内坂徹 総師長/木村典子 事務長/柴山善弘 チャブレン/ 水藤繁次		4月26日 チェルノブイリ原発事故
昭和62年	<ul style="list-style-type: none"> ○4月 訪問看護開始 ○11月 第1回糖尿病教室開講 ○12月 外科開設(12月1日伊藤道雄医師着任による) ○遊歩道の整備及び環境整備実施 ○広報活動及び「病院だより」の発行 		主 教/法用涉 理事長/法用涉 事務長/岩田義則 チャブレン/ 洪澤一郎		4月1日 国鉄分割民営化(JR グループ発足) 11月29日 大韓航空機爆破事件
昭和63年	<ul style="list-style-type: none"> ○1月 開業医とのオープンシステム化 ○5月 健康管理室設置、町民健診受付開始 ○9月 糖尿病外来、糖尿病教室開設 ○10月 保育所「すみれ保育所」再開 ターミナルケア学習会開始 デイホーム「さくら」の園「開設 ○CTスキャナ整備 ○12月 矢澤信明医師、副院長就任 				3月13日 青函トンネル開通 4月10日 瀬戸大橋開通
昭和64年 平成元年	<ul style="list-style-type: none"> ○4月 宮崎(亮・安子)医師ご夫妻着任 ○スタート博士レリーフ移動(病院玄関前)チャペル脇西側) ○アジアより研修生受入れ開始 11月 ポール医師(バンングラデシュ) 		総師長/上床益代 チャブレン/ 鈴木光信		4月1日 消費税導入 6月4日 天安門事件 11月9日 ベルリンの壁崩壊
平成2年	<ul style="list-style-type: none"> ○救急指定病院となる ○4月 バンングラデシュよりシユルジョヘプロム看護師研修 ○7月 オープンスペース「メイプル」開店 		事務長/諸木明政		10月3日 東西ドイツ統一
平成3年	<ul style="list-style-type: none"> ○3月 高山村家庭介護教室開催 ○4月 伊藤道雄医師、副院長就任 第1回バンングラデシュ医療協力 ○5月 内坂院長カンボジアへ医療協力 ○7月 第2回バンングラデシュ医療協力 ○9月 第3回バンングラデシュ医療協力 				12月26日 ソ連崩壊
平成4年	<ul style="list-style-type: none"> ○創立60周年(記念誌発行) ○6月 スプリングラー設置工事着工 オーストラリアへホスピスの研修視察 ○8月 バンングラデシュ医療協力 中国の斉念寧医師研修受入れ アメリカ、カナダ研修視察 ○11月 バンングラデシュのゴーシユ氏研修受入れ 		事務長/羽生公也		
平成5年	<ul style="list-style-type: none"> ○「命の水際を見つめて」信越放送で放映 ○4月 成人病予防健診指定病院として認可 老人デイクア承認 ○5月 小布施町在宅介護支援センター協力(町からの委託) ○7月 健康管理センター着工 献血推進協会賞受賞 ○8月 外国人無料健診活動協力 ○11月 健康管理センター竣工 ○12月 眼科開設 				7月12日 北海道南西沖地震
平成6年	<ul style="list-style-type: none"> ○2月 バンングラデシュ医療協力 第1回カンボジア医療協力 ○4月 内坂院長オーストラリアへホスピス研修 ○6月 歯科口腔外科開設 ○10月 段・園看護師研修受入れ(中国) ○11月 第2回カンボジア医療協力 ○12月 ネパール医療協力 				6月27日 松本サリン事件
平成7年	<ul style="list-style-type: none"> ○1月 内坂院長カンボジア医療協力 ○2月 婦人科開設 ○第2手術室完成 ○外科用イメージ装置整備 ○7月 北信外国人医療ネットワークの無料健診協力 ○10月 中国研修視察 ○11月 オーストラリアへホスピス研修視察 カンボジア医療協力 ○12月 バンングラデシュ医療協力 ○阪神被災地へ医療ボランティア協力(1月~4月、7月) 		名誉院長/ 橋爪長三		1月17日 阪神淡路大震災 3月20日 地下鉄サリン事件



1990年開店
オープンスペース「メイプル」



1993年竣工
「健康管理センターヘルシール」

年号	新生療養所・新生病院(日本聖公会・中部教区)	備考	人物	建物	社会の動き・できごと
平成4年	<ul style="list-style-type: none"> ○創立60周年(記念誌発行) ○6月 スプリングラー設置工事着工 オーストラリアへホスピスの研修視察 ○8月 バンングラデシュ医療協力 中国の斉念寧医師研修受入れ アメリカ、カナダ研修視察 ○11月 バンングラデシュのゴーシユ氏研修受入れ 		事務長/羽生公也		
平成5年	<ul style="list-style-type: none"> ○「命の水際を見つめて」信越放送で放映 ○4月 成人病予防健診指定病院として認可 老人デイクア承認 ○5月 小布施町在宅介護支援センター協力(町からの委託) ○7月 健康管理センター着工 献血推進協会賞受賞 ○8月 外国人無料健診活動協力 ○11月 健康管理センター竣工 ○12月 眼科開設 				7月12日 北海道南西沖地震
平成6年	<ul style="list-style-type: none"> ○2月 バンングラデシュ医療協力 第1回カンボジア医療協力 ○4月 内坂院長オーストラリアへホスピス研修 ○6月 歯科口腔外科開設 ○10月 段・園看護師研修受入れ(中国) ○11月 第2回カンボジア医療協力 ○12月 ネパール医療協力 				6月27日 松本サリン事件
平成7年	<ul style="list-style-type: none"> ○1月 内坂院長カンボジア医療協力 ○2月 婦人科開設 ○第2手術室完成 ○外科用イメージ装置整備 ○7月 北信外国人医療ネットワークの無料健診協力 ○10月 中国研修視察 ○11月 オーストラリアへホスピス研修視察 カンボジア医療協力 ○12月 バンングラデシュ医療協力 ○阪神被災地へ医療ボランティア協力(1月~4月、7月) 		名誉院長/ 橋爪長三		1月17日 阪神淡路大震災 3月20日 地下鉄サリン事件

年号	2000 平成12年	2001 平成13年	2002 平成14年	2003 平成15年
	<ul style="list-style-type: none"> ○1月 バングラデシユ医療協力 ○4月 介護保険制度開始に伴い、介護事業展開(訪問看護、居宅介護支援、介護療養病床、訪問リハビリ、通所リハビリ、居宅療養管理指導関係) ○11月 中庭遊歩道整備 ○バングラデシユから研修受入れ(5月/アラム医師、9月/アブドウーラ医師) 	<ul style="list-style-type: none"> ○2月 第1回バングラデシユ医療協力 ○5月 ホスピスチャリティーコンサート ○7月 杉山将洋医師、副院長就任 ○8月 第2回バングラデシユ医療協力 ○バングラデシユから研修受入れ(4月/アブドウーラ医師、8月/レマ医師) 	<ul style="list-style-type: none"> ○創立70周年 記念行事実施 ○記念誌「七十年史・新生」を発行 ○3月 バングラデシユ医療協力 ○6月 ホスピスチャリティーコンサート ○バングラデシユから研修受入れ(3月/デービット医師、10月/2003年1月/レマ医師) ○循環器内科開設 	<ul style="list-style-type: none"> ○2月 バングラデシユ医療協力 ○5月 法人格を医療法人から「特定医療法人」に変更
備考				
人物	総院長/古越祥子			総院長代行/ 榎原政裕(4月~12月) 榎原政裕
建物				
社会の動き・できごと	9月11日 米同時多発テロ事件	1月1日 ユーロ流通開始	5月31日 日韓サッカーワールド カップ開催	12月1日 地上デジタル放送開始

年号	1996 平成8年	1997 平成9年	1998 平成10年	1999 平成11年
	<ul style="list-style-type: none"> ○5月 ボランティア講座 6回連続で開催(7月) ○6月 オーストラリアから視察団来院 ○8月 イギリスへホスピス病院見学視察 ○11月 オーストラリアへホスピス研修 ○アフリカマラウイへ医療協力 ○デイホーム「さくら」の園→「デイサービスセンター」に合併 	<ul style="list-style-type: none"> ○創立65周年記念式 ○1月 ホスピス病棟竣工 ○第1回バングラデシユ医療協力 ○3月 第2回バングラデシユ医療協力 ○4月 消化器内科開設 ○5月 外国人無料健診協力 ○6月 中国医学院訪問 ○ボランテニア講座 6回連続で開催(8月) ○第3回バングラデシユ医療協力 ○7月 耳鼻咽喉科開設 ○8月 中国河北省から視察訪問 ○12月 スタート博士メモリアルホール竣工 ○スタート博士レリーフ移動(チャペル脇西側→チャペル脇東側) 	<ul style="list-style-type: none"> ○1月 第1回バングラデシユ医療協力 ○3月 第2回バングラデシユ医療協力 ○8月 第3回バングラデシユ医療協力 ○9月 療養病棟認可 ○10月 緩和ケア病棟(ホスピス)認可 ○内坂院長タイのホスピス訪問 ○研修受入れ(7月/中国、10月/デンマーク、11月/シカゴ) ○バングラデシユから研修受入れ(2月/ロイ医師、8月/アシユロフ医師) 	<ul style="list-style-type: none"> ○1月 バングラデシユ医療協力 ○7月 榎原政裕医師、副院長就任 ○バングラデシユから研修受入れ(4月/ニコラス医師)
備考			【ベッド数】 151床に減床	
人物		総院長/福島知恵子	主 教/森紀旦 理事長/唐沢彦三 事務長/松村隆	院長代行/ 榎原政裕(4月~5月) 院 長/佐藤裕信(6月) チャブレン/ 箭野直路
建物				
社会の動き・できごと			2月7日 第18回冬季オリンピック 競技大会が長野で開催	

未来に向けての対応と理念実現のためのグループ法人化【深く広く根を張って】	
2016 平成28年	<ul style="list-style-type: none"> ○須坂ケアセンターを開設「NPO法人パウル会」 ○「NPO法人ワンタイム」を設立 ○4月 バングラデシュ医療協力 ○ワンタイムとして初めてバングラデシュに医師派遣「NPO法人ワンタイム」 ○東日本大震災被災地病院に医師支援派遣(土日診療支援)「NPO法人ワンタイム」 ○支援先(宮城県気仙沼市立本吉病院) 2016年4月〜2017年9月/月1回
2015 平成27年	<ul style="list-style-type: none"> ○5月 バングラデシュ医療協力 ○9月 「NPO法人パウル会」を設立 「特定医療法人新生病院」から「NPO法人パウル会」に「訪問看護ステーション希望」居宅介護支援事業所かえで」を移管 電子カルテシステム導入
2014 平成26年	<ul style="list-style-type: none"> ○9月 地域医療フォーラム 「須高地域の包括医療における機能分化を考える」 ○10月 小布施町民を対象とした運動機能の追跡調査「おぶせスタディ」開始 バングラデシュ医療協力
2013 平成25年	<ul style="list-style-type: none"> ○3月 第1回バングラデシュ医療協力 ○4月 小布施健康づくり研究所開設 ○7月 X線骨密度測定装置(DEXA)導入 ○9月 通所リハビリテーションにパワーリハビリ機器設置 ○12月 第2回バングラデシュ医療協力
2012 平成24年	<ul style="list-style-type: none"> ○創立80周年 記念行事実施 記念誌「八十年史・新生」を発行 ○10月 カナダ聖公会首座主教フレッド・ヒルツ大主教来訪 第7回おぶせ地域医療フォーラム 「歴史の宝の再確認と未来の展望開拓」
2011 平成23年	<ul style="list-style-type: none"> ○9月 放射線画像診断システム(PACS)導入 ○10月 院内保育園施設「ミス・パウル保育園」開設 ○11月 第6回おぶせ地域医療フォーラム 「地域と共に歩む病院」

公益性をさらに増しながら、地域の医療機関の中での機能分化への取り組み【さらに深く根を下ろす】	
2011 平成23年	<ul style="list-style-type: none"> ○中野市に訪問看護ステーションサテライトを開設 ○2月 バングラデシュ医療協力 ○3月 東日本大震災物資支援協力(須高医師会) ○8月 「訪問看護ステーションおぶせ」を「訪問看護ステーション希望(のぞみ)」へ改称し、中野市に「ほくしんサテライト」開設
2010 平成22年	<ul style="list-style-type: none"> ○1月 (財)日本医療機能評価機構「病院機能評価」で長野県内初のVer.6.0の更新認定 ○2月 第1回バングラデシュ医療協力 ○3月 カナダ大使館で「チェルシーパンズ物語」読書会開催 ○9月 オランダリハビリシステム稼働開始 ○10月 第5回おぶせ地域医療フォーラム 「口腔ケア・口腔リハビリが目指す食べられる口づくり」 第2回バングラデシュ医療協力 ○12月 第3回バングラデシュ医療協力 バングラデシュから研修受入れ(2〜5月/ソレン・プロノティイ看護師、8月/カリム・アナフ医師)
2009 平成21年	<ul style="list-style-type: none"> ○小布施町大腸がん検診受託開始 ○2月 第1回バングラデシュ医療協力 ○4月 第2回バングラデシュ医療協力 ○11月 第3回バングラデシュ医療協力 ○12月 第4回バングラデシュ医療協力 バングラデシュから研修受入れ(8〜11月/ヒラリー・クレメント医師) ○株式会社メイプル設立 レストランメイプル、院内売店の運営を受託する
2008 平成20年	<ul style="list-style-type: none"> ○小布施町CT撮影肺がん検診、特定健診、高齢者健診受託開始 ○5月 第1回カンボジア医療協力 ○10月 第1回バングラデシュ医療協力 第2回カンボジア医療協力 ○11月 第4回おぶせ地域医療フォーラム 「在宅終末期ケアと看取りの推進」 ○12月 第2回バングラデシュ医療協力 バングラデシュから研修受入れ(7〜9月/ポール・サダンナ・パイディア医師)

新生療養所・新生病院(日本聖公会・中部教区)

備考

人物

建物

社会の動き・できごと

○病床編成
地域包括ケア病床を6床から10床に増床

○病床編成
一般病床に地域包括ケア病床6床開設

病院事務部長兼務/
宮尾陽(2015年4月
〜2017年5月)
チャブレン/
金善姫

看護部長/
伊藤光子
病院事務部長/
花村二三

院長/宮尾陽一

チャブレン/
石田雅嗣

主教/渋澤一郎



2016年竣工
パウル会「須坂ケアセンター」

1月15日
スキーバス転落事故(軽井沢)
4月14日
熊本地震

10月5日
マイナンバー制度開始

9月27日
御嶽山噴火

5月22日
東京スカイツリー開業

3月11日
東日本大震災
3月12日
長野県北部地震(栄村)

4月
後期高齢者医療制度創設



100年に向けて

地域(世界)の皆様とともに
 創設者たちの想いに立ち返り続けながら
 そしてそれが私たちの原点であることを胸に
 職員が手を取り合って
 職員一人ひとりが志を新たに
 変化に対応しながら
 親切で誠実な心を養いながら
 誇りと喜びをもって
 患者さん、利用者さん、地域の方々が
 その方らしい人生を歩んでいただくために
 私たちにできることは僅かなことであっても
 新生病院グループの歴史と共に
 進んでいきます



未来に向けての対応と理念実現のためのグループ法人化【深く広く根を張って】

年号	2017 平成29年	2018 平成30年	2019 平成31年 令和元年	2020 令和2年	2021 令和3年	2022 令和4年
新生療養所・新生病院(日本聖公会・中部教区)	<ul style="list-style-type: none"> ○ワンタイムとして初めてバングラデシユより医師1名の研修受け入れ「NPO法人ワンタイム」(1~2月/ニシャット医師) ○5月 ミスパウル記念館解体、移築工事起工 ○12月 ネパールに初めて医師派遣「NPO法人ワンタイム」 ○7月 看護部門の機能強化のため「法人看護局」を新設 	<ul style="list-style-type: none"> ○新生病院隣に小布施ケアセンターを開設「NPO法人パウル会」 ○既存事業に加え看護小規模多機能型居宅介護施設(小布施町委託)等を開設「NPO法人パウル会」 ○1月 ミスパウル記念館移築完了、引渡し ○3月 ミスパウル記念館竣工記念礼拝 	<ul style="list-style-type: none"> ○4月 ネパール現地視察 ○9月 バングラデシユ医療協力 ○10月 台風19号被害による近隣被災病院患者の受け入れ 	<ul style="list-style-type: none"> ○訪問看護ステーション中野サテライト事務所を中野市吉田に移転し中野ケアセンター化「NPO法人パウル会」 ○5月 ご寄附により、患者搬送車「竹村号」を導入 ○10月 初の試みとなるWEB新生病院祭の開催 	<ul style="list-style-type: none"> ○4~5月 新型コロナウイルス院内感染により、入転院受け入れ外来診療、通所リハビリテーションのサービス提供休止 	<ul style="list-style-type: none"> ○3月 中野市豊田地区に移動販売車による買い物支援サービス開始 ※移動スーパー「楓香堂」【株式会社メイプル】
備考	<ul style="list-style-type: none"> ○病床編成 4月 地域包括ケア病床を10床から20床に増床 			<ul style="list-style-type: none"> ○病床編成 2月 地域包括ケア病床を18床に減床 	<ul style="list-style-type: none"> ○病床編成 地域包括ケア病床を18床から36床に増床 	
人物	<ul style="list-style-type: none"> 院長/大生定義 看護部長/酒井明恵(3月~6月) 法人看護局長/伊藤光子 	<ul style="list-style-type: none"> チャブレン/大和孝明 	<ul style="list-style-type: none"> 理事長/洪澤一郎 病院事務部長/後藤孝志 	<ul style="list-style-type: none"> 主教/西原廉太 	<ul style="list-style-type: none"> 院長/石井栄三郎 法人事務局長/荒木庸輔 	
建物	 <p>2018年竣工 パウル会小布施ケアセンター</p>					
社会の動き・できごと			<ul style="list-style-type: none"> 10月12日 令和元年東日本台風(台風19号)上陸 12月 新型コロナウイルス感染症が中国で集団発生 	<ul style="list-style-type: none"> 3月24日 東京2020オリンピックピック、パラリンピック競技大会開催延期決定 4月7日 新型コロナウイルス感染症に対する国内初の緊急事態宣言発令(東京都を含む7都府県) 	<ul style="list-style-type: none"> 7月23日 第32回夏季オリンピックピック競技大会が東京で開幕 8月24日 東京2020パラリンピック競技大会開幕 	

新生病院グループ90年の歩み



90年の歩みへの感謝と、
100年に向けた新たな歩みだし
—

●山彦会員の皆様はじめ多くの方々に貴重な写真を提供いただきました。

2022年10月●日 第一刷発行

発行責任者／ 洪澤一郎

発 行 所／ 特定医療法人 **新生病院**

〒381-0295 長野県上高井郡小布施町851

TEL026-247-2033 (代) FAX026-247-4727